埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第17集

深　谷　城　跡

1987.3

埼玉県深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第17集

深谷城跡

1987.3

埼玉県深谷市教育委員会

深谷市指定文化財　深谷城趾絵図　荻野藤治氏蔵

序

埼玉県の旧跡に指定されている深谷城跡は、深谷市のほぼ中心にあり、深谷市のシンボル的な存在となっております。市の中心部であるだけに、現在は深谷小学校、城址公園、市民文化会館などの公共施設や住宅などが密集しており、遺構はほとんど残されておりません。しかし、城跡東端の富士浅間神社を巡る外濠跡などに、往時の深谷城の面影を偲ぶことができます。

深谷城は木瓜城とも呼ばれ、深谷上杉第五代、上杉房憲により康正２年(1456)に築かれたと伝えられております。深谷上杉氏は、天正18年(1590)、豊臣秀吉に攻められた小田原北条氏と命運を共にして滅びました。その後、徳川家康の親族や譜代大名などが入れ替わり城主となりましたが、寛永３年(1626)、廃城となりました。以後、深谷は中山道の宿場町として発展しましたが、この宿場町は深谷城の城下町を中核として形成されていったものと考えられます。深谷城こそは、正しく今日の深谷市の発展の礎であると申せましょう。

このたび、市街地の中央を南北に貫く都市計画街路中央通り線が、さらに北へ延長されることになり、工事予定地が深谷城跡内であると推定されることから、工事に先立ち発掘調査を実施いたしました。その結果深谷城の内掘跡、外掘跡などを発見し、貴重な成果を挙げることができました。私たちが常日頃踏みしめている大地の中から現れた城跡の威容を目前にしますと、先人の業績あればこそ現在の私たちの社会が成り立っているということが、改めて身に泌みて感じられました。

最近は深谷上杉氏に対する一般の関心も高まり、市制30周年を記念して昭和60年より深谷上杉まつりが城跡公園を中心として盛大に取り行われております。この様子は、郷土を愛する心こそが現在そして未来の郷土の繁栄を導くのであるということを、象徴しているかのごとく思われます。

最後に関係者のみなさまに厚く感謝申し上げるとともに、郷土深谷市のさらなる発展を祈念して、序といたします。

昭和62年３月

深谷市教育委員会
教育長　鳥　塚　恵和男

例　　言

1．本書は、深谷市都市計画街路中央通り線工事に伴う、埼玉県深谷市仲町400番地ほか所在遺跡の発掘調査報告書である。遺跡名は深谷城跡とした。

2．発掘調査は、深谷市都市計画課から深谷市教育委員会が委託を受け、昭和61年度事業として実施した。

3．調査経費は、国庫補助事業深谷市都市計画街路中央通り線工事費より支出した。

4．現地発掘調査中の写真撮影、遺物の写真撮影及び本書の執筆・編集は、澤出晃越が行った。

5．遺構・遺物の実測及び実測図のトレース、拓本等は、調査参加者全員で行った。

6．遺構の説明における数値は、確認面においてのものである。また、挿図中の方位は、座標北を示している。

7．本書の作成にあたり、下記の方々から御助言・御指導を賜った。

井上　肇、今井　宏、梅沢太久夫、小野義信、金子真士、橋本富夫

発掘調査の組織

調査主体者　深谷市教育委員会　教 育 長　鳥塚恵和男
教育次長　堀　　輝雄

事　務　局　深谷市教育委員会社会教育課　課長　飯島光武
課長補佐　河田記久平
文化財保護係長　工藤友明
主任　小林京子

調査担当者　深谷市教育委員会社会教育課　主事　澤出晃越

調査補助員　平井厳（埼玉大学研究生）

調査参加者　井上純子　宇賀地桂子　大原黎子　加藤佳子　加瀬律子　河合詔子　久米紀子　小沼和子　小林裕子　佐々木由紀子　里山まり子　清水和子　白川定子　鈴木令子　砂田伊久子　須山俊子　田淵勝子　都築百合子　鉄石光美　土師澄子　細川ケイ子　松本佳子　水野祥代　本橋玲子　森　光代　湯沢直子　渡辺哲子

目　次

序
例　言
目　次

Ⅰ．発掘調査に至る経過……1

Ⅱ．深谷城跡の地理的環境……3

Ⅲ．深谷城跡について……5

Ⅳ．調査の概要……9

Ⅴ．Ａ区の遺構と出土遺物
　1．遺　構……10
　2．出土遺物……10

Ⅵ．Ｂ区の遺構と出土遺物
　1．遺　構……14
　2．出土遺物……16

Ⅶ．Ｃ区の遺構と出土遺物
　1．遺　構……18
　2．出土遺物……27

Ⅷ．Ｄ区の遺構と出土遺物
　1．遺　構……33
　2．出土遺物……35

Ⅸ．内掘と外掘について……37

Ⅹ．まとめ……41

写真図版

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（１／40,000）
第２図　調査区位置図（１／5,000）
第３図　各区関係図（１／400）
第４図　Ａ区全測図（１／160）
第５図　Ａ区の遺構（１／60）
第６図　Ａ区の出土遺物（１／３）
第７図　Ｂ区全測図（１／160）
第８図　Ｂ区の遺構（１／60）
第９図　Ｂ区の出土遺物（１／３）
第10図　Ｃ区全測図（１／160）
第11図　Ｃ区の遺構(1)（１／60）
第12図　Ｃ区の遺構(2)（１／60）
第13図　Ｃ区の遺構(3)（１／60・１／30）
第14図　Ｃ区の遺構(4)（１／60）
第15図　Ｃ区の出土遺物(1)（１／３）
第16図　Ｃ区の出土遺物(2)（１／３）
第17図　Ｄ区全測図（１／160）
第18図　Ｄ区の遺構(1)（１／60）
第19図　Ｄ区の遺構(2)（１／60）
第20図　Ｄ区の出土遺物（１／３）
第21図　内掘・外掘土層断面図（１／80）
第22図　内掘・外掘模式図
第23図　深谷城跡復元図（１／5,000）

Ⅰ．発掘調査に至る経過

埼玉県北部に位置し、利根川を挟んで群馬県と接する深谷市は、近代日本経済界の偉人、渋沢栄一の生地として、また、深谷ネギの産地として知られている。古くは深谷上杉氏の一人、上杉房憲が康正２年（1456）に築いたといわれる深谷城の城下町として、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約90,000人、面積約70km^{2}で、農業生産高は県内随一を誇り、工業団地の形成、住宅の増加など、急速に都市化が進行している。

こうした都市化の波に対し、深谷市は居住環境の整備等の事業を推進している。道路網の整備も重点事業の一つである。

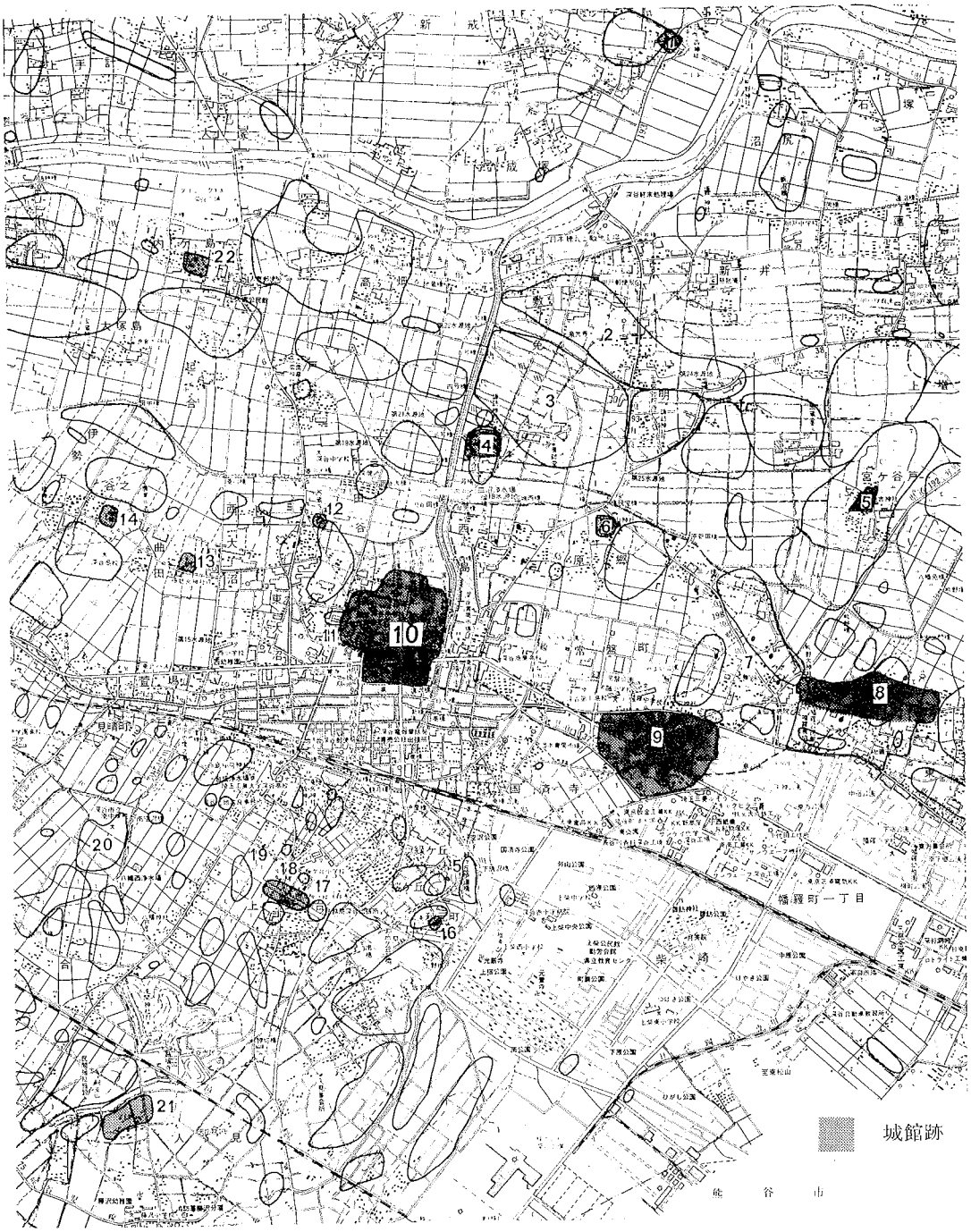
都市計画街路中央通り線は、市の中心部を南北に通り、国道17号線と県道深谷嵐山線を結んでいる道路である。この中央通り線は、国道17号線よりさらに北へ延長されて、市街地の北側を東西に通るように計画されている都市計画街路北通り線まで達する予定になっている。

中央通り線の北への延長予定部分のうち、国道17号線との交差点から北へ約400ｍほどの区間の工事が、昭和61年度に実施されることになった。この工事予定地は、深谷城跡の中央を南北に縦断している。このうち北半の延長約250ｍの区間については既存の道路に若干の改修を加えるものであり、遺構等は消滅していた。南半の延長約150ｍの区間はもと宅地であり、遺構が残存している可能性が高く、遺跡の保護対策が問題となった。工事担当課である市都市計画課と市教育委員会は協議を行い、対象地の試掘調査を行うことにした。

昭和62年３月28日に試掘調査を実施し、遺構が残っていることを確認した。そこで都市計画課と教育委員会は再び協議を行い、遺跡を記録保存するために発掘調査を実施することとし、その準備を進めることになった。

深谷城跡が埼玉県指定旧跡であるため、都市計画課は工事責任者である市長名で、市教育委員会を通じ、県指定旧跡現状等変更届を県教育委員会へ提出した。さらに市長名にて市教育委員会へ、当該発掘調査の依頼があり、両者の間で委託協定が結ばれた。県指定旧跡現状等変更届の受理通知が市教育委員会へ届くとともに、委託協定に基づき市長名にて発掘通知を、教育長名にて発掘調査通知を、それぞれ県教育委員会を通じて文化庁長官へ提出した。

市教育委員会は具体的に発掘調査の準備を進め、７月２日、パワーショベルによる表土の削除から発掘調査を開始した。



1、新開荒次郎館跡　2、上敷免北遺跡　3、上敷免遺跡　4、皿沼城跡　5、堀の内
6、伝幡羅太郎館跡　7、木の本古墳群　8、東方城跡　9、庁鼻和遺跡　**10、深谷城跡**
11、深谷町遺跡　12、大沼弾正忠屋敷跡　13、桜田馬場　14、曲田城跡　15、桜ケ丘組石遺跡　16、秋元氏館跡　17、割山遺跡　18、割山西遺跡　19、鼠裏遺跡　20、萱場松原遺跡
21、人見館跡　22、内ケ島氏館跡

第１図　遺跡位置図（1/40,000）

II．深谷城跡の地理的環境

深谷城跡は、埼玉県深谷市仲町400番地ほか、高崎線深谷駅の北約800ｍにある。現在の深谷市中心部の北側である。平坦な低地上で、標高は約35ｍである。

深谷市とその周辺は、市の中央部をほぼ東西に通る高崎線を境界として、南側の櫛挽台地と北側の妻沼低地に二分される。櫛挽台地は、荒川の作用により形成された、寄居付近を扇頂として北へ広がる扇状地性の洪積台地である。妻沼低地は、利根川の作用により形成された沖積低地である。

櫛挽台地は乾燥した台地であり、晩冬から初春にかけてひどい土埃に悩まされることもしばしばである。養蚕が盛んで桑畑が広がっているが、近年は花・植木などの栽培も盛んになっている。また、台地北端部は、居住環境の整備等により住宅などが急増している。構造的には、西北側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御稜威ケ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼ高崎線沿いの崖線で、比高５～10をもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8㎞ほど延びており、比高２～５ｍをもって妻沼低地と接している。接線付近の標高は、櫛挽面が40～50ｍ、寄居面が32～36ｍ、妻沼低地が30～31ｍである。櫛挽面の西には、岡部町山崎山などの松久丘陵を挟んで立川面に比定される本庄台地が広がっている。寄居面の南側には、荒川を挟んで下末吉面に比定される江南台地が東西に延びている。櫛挽面の北東端近くには、第三紀層からなる残丘、標高98.0ｍの仙元山があり、熊谷市内の寄居面東端にも同様の残丘、標高77.4ｍの観音山がある。なお、台地北端の櫛挽面と寄居面の境界付近に深谷断層とよばれる活断層が確認されている。

妻沼低地は、利根川流域に広がる広大な低地である。南は荒川低地に続き、東は加須低地に連なっている。妻沼低地内は、利根川の作用により自然堤防が発達していたものと思われ、深谷市内には血洗島、矢島、大塚島、内ケ島などの島地名が多いこともこのことを裏付けている。現在は、耕地整理等によりかなりの部分が水田化されており、旧状を把握することは困難である。しかし、深谷市遺跡詳細分布調査（註１）や国道17号線深谷バイパス建設工事に伴う遺跡発掘調査（註２）などにより、遺跡が島地名の土地を包括して連続していることが確認された。このことは自然堤防の様子をよく表しているものと思われる。なお、妻沼低地の南端、南に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の市街地があり、周辺では宅地化が進行している。

深谷城跡は、妻沼低地の南端部、現在の市街地の北側にある。北および西は低湿地が広がり、東は北流する唐沢川を挟んで寄居面北端に接し、南は小規模な城下町が形成されていたようである。すなわち深谷城は、同じ頃に上杉氏方が古河公足利成氏の攻勢に対抗するために築造した、江戸城や岩槻城などと同様に、低地の条件を十二分に考慮して構築された。防禦堅固な平城であったと考えられる。

註１　昭和56・57年度事業として実施。調査主体は深谷市教育委員会。
註２　昭和58年度から調査中。調査主体は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

第２図　調査区位置図（1/5,000）

Ⅲ．深谷城について

深谷城は平坦な低地に築かれた平城であった。深谷上杉氏の一人、上杉房憲が康正２年（1456）に築いたという説が有力である。

深谷上杉氏は、14世紀の後半頃、庁鼻和（現在の深谷市国済寺）に城を構えた上杉憲英を祖とする。憲英は、関東執事後に関東管領となった山内上杉氏の祖、上杉憲顕の子である。父憲顕が貞治元年（1362）に上野・越後両国守護に復職しており、憲英自身もこの後に上野国守護・奥州管領に任じられているらしい。このため、上野国を本拠地とし、越後方面でも足利幕府に反抗していた南朝方の新田義宗、義治らを鎮圧することを主要な目的として、憲英が庁鼻和城を築いたものと考えられる。目的の１つには、関東から越後国への通路を確保することもあったであろう。庁鼻和城の東には、上野国へぬける主要道が南北に通っていたといわれ、新田義貞の鎌倉攻めや、上杉禅秀の乱における山内上杉憲基の進攻などの経路であったともいわれている。なお、庁鼻和城の北辺は、現在旧中山道が東西に通っている。

憲英の子憲光と、さらにその子の憲長は、応永23～24年（1416～17）の上杉禅秀の乱に、山内上憲基方として参加している。この乱において憲光の弟の憲国が上杉禅秀方として参加しているが、これは、惣領制の解体や在地領主制の形成など、当時の東国武家社会内部のダイナミックな動きを知る一例として把えることができよう。憲光は文安２年（1445）に、憲長は後に熊谷市広瀬へ蟄居し、宝徳３年（1451）に没したと伝えられる。また、憲光・憲長ともに上杉禅秀の乱で討死したとする系図もある。なお、憲長の子憲武は、市内人見にある人見氏の館跡を改修して居住し、人見屋形を称したといわれる。

憲長の弟憲信は、私市（騎西）城主とする系図もあるが、現騎西町にはそれを裏付ける資料等は今のところないようである。“固鼻和（庁鼻和）ニオル”と記した系図もある。永享10～11年（1438～39）の永享の乱、永享12～嘉吉元年（1440～41）の結城合戦などに参加しており、主に山内上杉の家宰である長尾景仲と行動を共にしている。また憲信は、後の古河公方足利成氏と上杉氏の抗争においても奮戦している。没年は不明であるが、諸系図に載る命日は正月21日又は22日となっている。足利成氏の書状をもとに、康正２年（1455）12月の成氏の私市城攻めの際に負傷し、翌年正月21日又は22日に没したという説がある。しかし、同書状のなかに享徳４年（1455、７月に康正に改元）正月21日、22日の高幡・分倍河原の合戦において成氏が上杉右馬助入道を討取ったことがみえ、この右馬助入道が憲信である可能性がある。合戦の日と憲信の命日が一致することも単なる偶然とは考え難い。

憲信の子が房憲である。深谷城の築城者を憲英または憲信とする説もあるが、先述したように、深谷城は房憲により康正２年（1456）に築かれたとする説が、現在では最も有力である。『鎌倉大草紙』に、康正２年10月の古河公方足利成氏と深谷上杉氏の戦闘の記載がある。「又敵方には武蔵国には上杉武蔵入道性順（憲信のこと）息男房顕（房憲であろう）は武蔵人見へ打て出、上州の味方と引合、深谷に城を取立てける」（カッコ内筆者）というものであるが、これが房憲が康正２年

に深谷城を築いたとみる根拠となっている。なお、憲英説をとっている『新編武蔵国風土記稿』は、明らかに憲英と房憲を混同している。深谷城が康正２年に築かれたとみるのは、当時の周囲の状況を考慮しても肯首しうるところである。当時、上杉方は、古河公方足利成氏の攻撃に備え、大田資清・特資（道灌）父子に命じて河越城・岩付城・江戸城などを築かせたが、深谷城もこうした上杉方の防禦線形成の一環として築城されたものと考えられるよう。なお、『新編武蔵国風土記稿』によれば、市内伊勢方に伊勢方城跡があり（その場所ははっきりしない）、深谷城築城の際に仮城として築かれたものという。

房憲の孫の憲賢の頃になると、小田原北条氏の関東進出が著しくなった。北条氏の関東支配を決定づけた史上有名な天文15年（1546）の川越夜戦に、憲賢が山内上杉憲政方の一将として参戦していた可能性もある。しかし憲政がその居城であった平井城落城により越後国へ逃れた後は、憲賢は北条氏康に服したようである。憲賢の子憲盛は、上杉謙信の関東攻めの際には謙信に従い、永禄４年（1561）の小田原城攻めには謙信直属の将として参加した。しかし、謙信が越後国へ引上げた後は再び北条氏に服し、元亀４年（1573）には憲盛は北条氏政・氏邦と和睦の誓紙を交し、深谷上杉氏は事実上鉢形成主北条氏邦の傘下に入ることになった。この時憲盛の子氏盛は、北条氏政の娘を娶り、名を氏憲と改めた。深谷上杉氏が完全に小田原北条氏に服属したため、この後深谷城が上杉謙信や武田信玄・勝頼に攻められたことが記録にみえる。こうした状況から、いわゆる戦国時代において、大勢力の狭間にあった小氏族の苦境を如実に窺い知ることができる。

天文18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めの際、深谷城主氏憲は小田原城に篭っており、深谷城は重臣の秋元長朝、杉田因幡らが守っていた。しかし鉢形城が陥落し、さらに前田利家、浅野長政らの大軍が本庄、岡部付近に迫るに及び、秋元長朝らは大勢をみて降伏し、深谷城は無血開城され、ここに深谷上杉氏の歴史は幕を閉じた。なお深谷上杉氏の時代には、深谷城の東約2.5kmに東方城、北約0.8kmに皿沼城、西約2.0kmに曲田城（谷之城）、南約1.6kmに秋元氏館と、深谷城の四方に出城的な城塞が随時築かれていたようである。

徳川家康が関東に入った後は、深谷城にはまず松平（長沢）康直が一万石で入ったが、文禄２年（1593）に病死した。その後家康の子の松千代が入ったが、８才で早逝し、さらにその弟の辰千代が長沢松平を継いで名を松平忠輝と改めて慶長３年（1598）より深谷城主となった。忠輝は慶長７年（1603）に下総国佐倉へ移封され、深谷城は少しの間城主を失ったが、慶長15年（1610）松平忠重が封ぜられた。忠重は元和元年（1622）に上野国佐貫へ移封され、替って酒井忠勝が入封した。忠勝は寛永元年（1624）に老中となり寛永３年（1626）に忍へ移封され、深谷城は廃城となった。深谷領は寛永11年（1634）に代官支配地となり、正保元年（1644）、深谷城は取り壊された。元禄５年（1692）には深谷城跡の開墾が許され、その後はカラー口絵の深谷城阯絵図にみられるように土塁と堀の一部を残してほとんどが耕地化されていったようである。

深谷城跡は、昭和の初め頃まではその形状をよく留めていたらしいが、現在は宅地・学校などほとんどが開発されてしまい、外堀と土塁のごく一部が残存しているのみである。外堀は、城域の東隅の富士浅間神社（通称智形神社）の周囲に南北約50ｍほど残っており、最大幅は約13ｍである。家屋からの排水などが流れ込み、全くの下水と化してしまったため、安全・衛生面を考慮し、地元

からの要請もあて全面が枯山水風に改修された。富士浅間神社と市コミュニティセンターの間を南北に流れる排水路も堀跡を利用したらしい。土塁は、市役所の裏にある高台院の裏（西側）に約10ｍほど残存し、その北約150ｍにもわずかに土塁らしき土盛りが確認できる。深谷小学校と国道17号線の間にも土塁と思われる土盛があり、その上に管領稲荷が祀られている。この付近は以前は城の山と呼ばれ、昭和30年代頃まではもっと高く大きかったらしく、石壇を登ったということである。深谷小学校の南西にある基地も周囲より高くなっており、土塁を利用した可能性がある。この基地と管領稲荷の間の深谷小学校へ通じる南北道路辺りに、昭和の初め頃まで管領の池と呼ばれる池があったらしく、外堀の一部と考えられる。

深谷城の平面構造は、『武蔵志』所載の深谷古城図、カラー口絵の深谷城趾絵図、小字名などからある程度推定できる。第23図は、それらをもとに試みに現在の地図に復元して作成した模式図である。細部では上記の古城図などとは照合しない部分もあるが、概略はこのようなものであったと推定できよう。高台院の裏とその北に残る土塁は推定城跡範囲の更に西側となり、外堀と城跡西側の低湿地の間に更にもう一郭があったのかもしれない。或いは二丸・西丸が推定図よりも西側であった可能性もあろう。

なお、現在「史蹟深谷城趾」という碑が建っている深谷小学校庭の南東武は、本丸跡とも伝えられるが、少し小高くなっており、土塁の痕跡とみるべきであろう。本丸という字もこれよりも東側にある。

○『武蔵志』所載の「深谷記」にある深谷古城図に次のようなことが記されている。

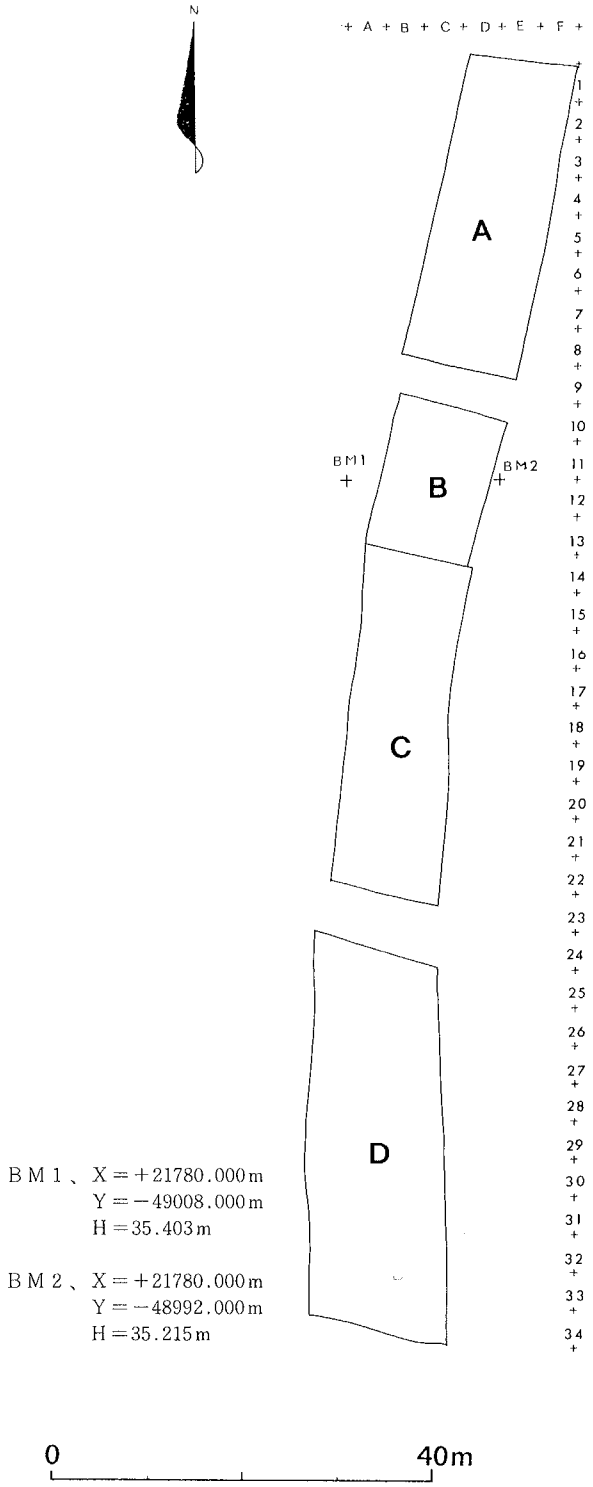
深谷古城図　八幡山へ四リ寄居へ三リ　北水田遥ニ続　東西平原也　南人見山遥隔　城地一体平地ナリ　大手　搦手　本丸　二丸　西丸　東曲輪　北曲輪　秋元越中曲輪　掃部曲輪　千形　八幡弁天　中仙道深谷宿　さらに櫓の位置も記されている。

○『新編武蔵国風土記稿』の榛沢郡深谷宿の項

古城蹟　宿ノ北ノ方ニアリ当宿ト田谷村ニカカレリ今モ四方共土居構堀ノ跡残リ構ノ内皆陸田トナレリ此城平城ニシテ南ヲ首トシ北ヲ尾トス南ニ大手口アリテ夫ヨリ西ヲ掃部曲輪ト唱ヘ其西ヨリヲ西丸ト呼ビ西丸ヨリ堀ヲ隔テ東ヲ西丸トイヒ二丸ヨリ又堀ヲ隔テ東ニ本丸アリ本丸ヨリ東ニ当リテ東曲輪アリココモ堀ヲ隔テタリ本丸ノ北ハ側北曲輪ニテ北曲輪ノ内最北ヘヨリタル邊リヲ秋元越中曲輪ト唱フコハ上杉ノ家人秋元越中守長朝居シ所ナレバ呼名トスルトイヘリ（後略）

〈参考文献〉

○大里郡郷土誌　下田江東編　大正８年
○深谷町誌　山口平八編　昭和12年
○郷土史事典埼玉県　大村進・秋葉一男編　昭和54年
○深谷上杉氏の歴史　深谷上杉顕彰会　昭和61年
○埼玉懸史　昭和９年
○深谷市史　昭和44年
○武蔵の古城址　小幡晋　昭和55年



第３図　各区関係図（1/400）

Ⅵ、調査の概要

調査は、生活道路や排水路が調査区を横断していることや、排土置き場の関係などから、北からA区～D区の4区に分けて実施した。調査区には4mグリッドを設定し、グリッドは、北から南へアラビア数字を、西から東へアルファベットを付して呼称した。

昭和61年6月2日、パワーショベルによるA区・B区の表土削除より調査を開始した。6月3日、A区の精査から作業員による作業を開始した。B区の表土削除も終わり、A区とB区の調査を並行して行うことにした。6月4日、A区南端からB区北端にかけて大規模な堀跡を検出し、本丸を囲む内堀跡の一部であろうと推定した。6月10日、A区・B区ともに土拡、溝条遺構などの調査をほぼ終了し、11日よりは内堀跡にトレンチを設定して表面的な掘削を試みた。しかし湧水が激しく、思うような成果は得られなかった。6月13日、A区内堀内第2トレンチより木樋状の板材が検出されたため、その部分のみ掘り広げた。6月16日A区・B区の全景写真を撮影し、19日にパワーショベルにより内堀跡の一部を掘削して深さや底面の状態を確認し、A区・B区の調査を終了した。

6月21日、23日にはA区・B区を埋め戻し、C区の表土を削除した。

6月24日から7月5日までは事情により調査を一時中断した。

7月7日、C区の精査から調査を再開した。C区は、A区・B区以上に湧水が激しく、調査区の縁辺に排水路を作り、排水ポンプは毎日フル回転に近い状態で、調査の進展にかなり支障があった。7月15日は雨により作業を中止にしたが、この雨水のためにC区はほとんどプール同様の状態になってしまい、排水には翌16日まる一日を要するという有様であった。

7月28日、C区の土坑、井戸跡等の調査がほぼ終了し、柱穴等の調査を残すのみとなったため、D区の表土を削除し、29日にはD区の精査を開始した。7月30日、C区の全景写真を撮影し、C区の調査を終了した。また、D区の南端に大規模な堀跡があることを確認し、外堀跡と推定した。

8月4日、D区の土坑、井戸跡の調査をほぼ終了し、外堀跡にトレンチを設定してA区と同じように表面的な掘削を試みた。8月7日、D区の全景写真を撮影し、外堀跡の一部をパワーシャベルにより掘削し、深さや底面の状態を確認した。

8月8日、器材を撤収し、発掘調査全体を終了した。

A区～D区を通じ、井戸跡を含む土坑や柱穴が多数検出され、細く浅い溝状遺構も各区で検出された。また、上記のようにA区とB区の間に内堀跡が、D区の南端に外堀跡が確認された。土坑や柱穴などの遺構はB区とC区に多く、A区とD区ではまばらであった。この状況は、内堀、外堀の内側が土塁であったことを示唆しているように思われる。

出土遺物はごく僅かであり、ほとんどが小破片である。それも近世末期のものと思われる土器片や陶器片が大半を占め、縄文土器片や石斧、10世紀頃のものと思われる土師器甕や須恵器高台付坏なども出土した。しかし、残念ながら深谷城の時代のものと思われる遺物は非常に少なかった。

Ⅴ．Ａ区の遺構と出土遺物

１．遺構

○第１号土坑（第５図）

２－Ｅ・Ｆグリッドに位置する。2.8×1.2mほどの不整形を呈する。深さは約60cm。壁の中位に稜を有し、底面は凹凸が激しい。

○第２号土坑（第５図）

４－Ｃ・Ｄグリッドに位置する。西側に攪乱を受けており長さは不明であるが、幅は約１ｍ、深さは約60cmである。底面は凹凸がある。

○第１号井戸跡（第５図）

４－Ｄグリッドに位置する。径約1.6ｍの円形を呈する。深さは３ｍ以上あるものと思われるが、確認はできなかった。全体は筒状を呈し、壁は凹凸があり、一部が若干袋状になっている。覆土は確認面から約80cmまでがローム粒子・ブロックを含む黒褐色土、その下約180cmまでが砂を含む暗褐色土、その下が砂を多く含む黒色土である。全体にしまりは悪く、酸化鉄を多く含んでいた。

○第１号溝状遺構（第５図）

調査区の３グリッドを横断している。幅30～60cm、深さ10～20cmほどの小さな溝状遺構である。底部は舟底状を呈し、覆土はローム粒子を含む黒色土であった。

○木樋状遺構（第４図）

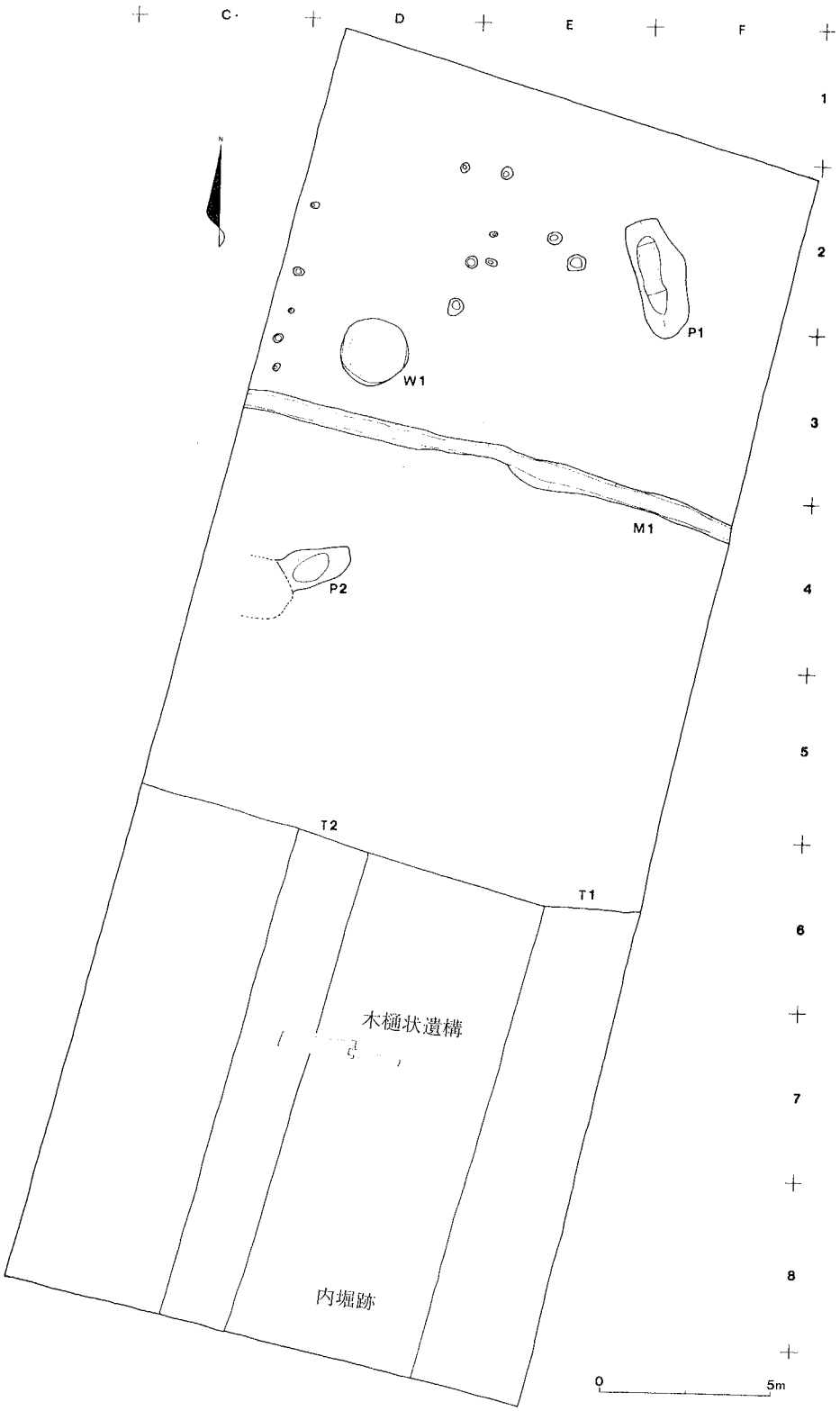
内堀内に設定した第２トレンチ内の７－Ｄグリッドで、確認面より深さ約20cmで検出された。内彎した板材が２枚、東西方向に組合わされていた。板材は、石側が長さ約230cm、幅40～50cm、端部がその上に乗っていた東側の板材が、長さ約150cm、幅約20cmであった。

２．出土遺物

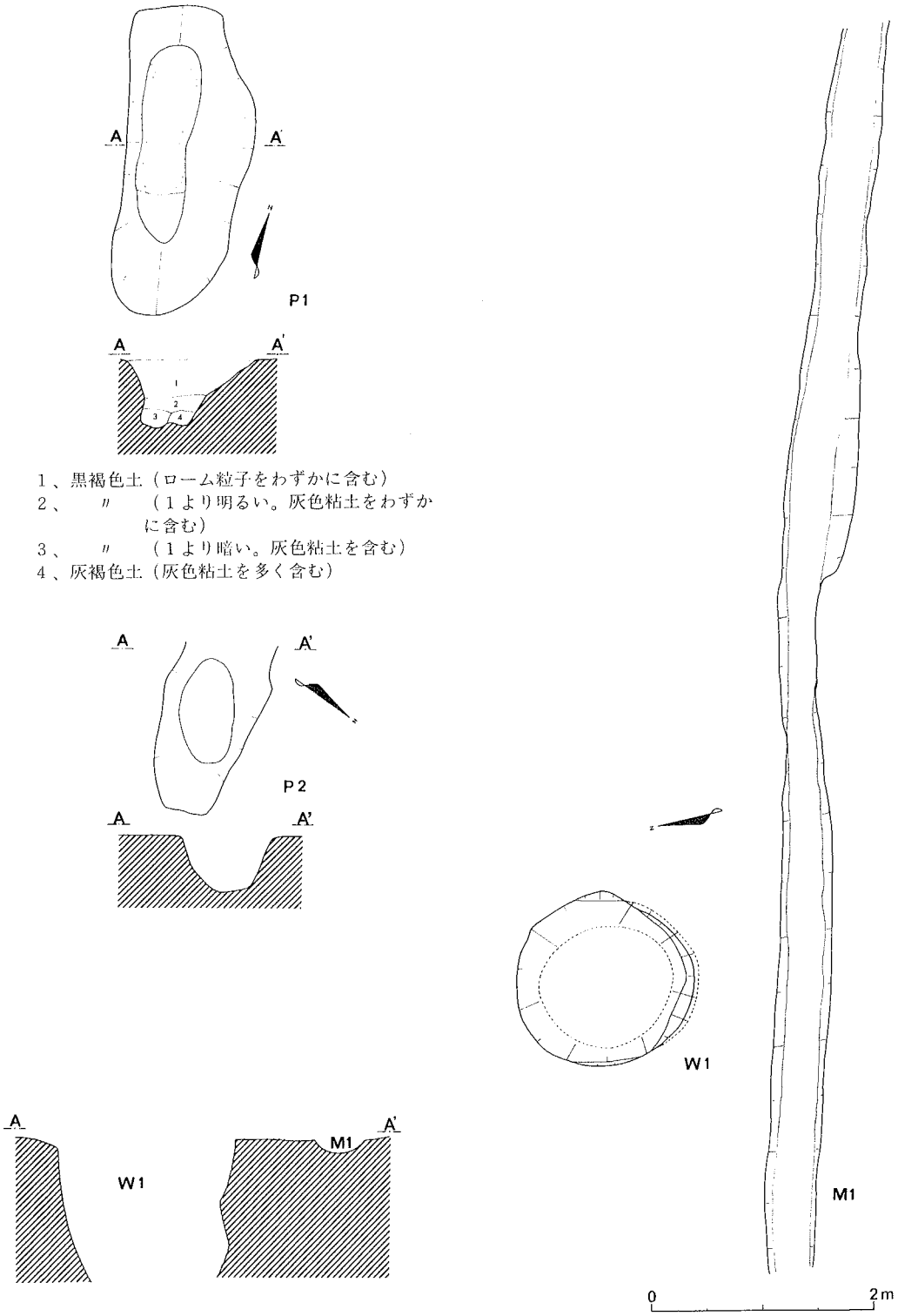
○内堀第１トレンチ出土遺物（第６図１・２）

１．灰釉陶器の底部破片である。器形は不明。推定底径9.0cm。底部は凹面の上げ底となっている。内面全面及び外面上位に灰釉が施されており、底面内面周囲の釉の溜っている部分はわずかに緑色を帯び貫入が認められる。胎土微細、焼成は堅緻で須恵質、素地は灰色を呈する。

２．硯の破片である。幅6.1cm、高さ2.0cm。約３分の２を欠損しており、磨面にわずかに墨が付着

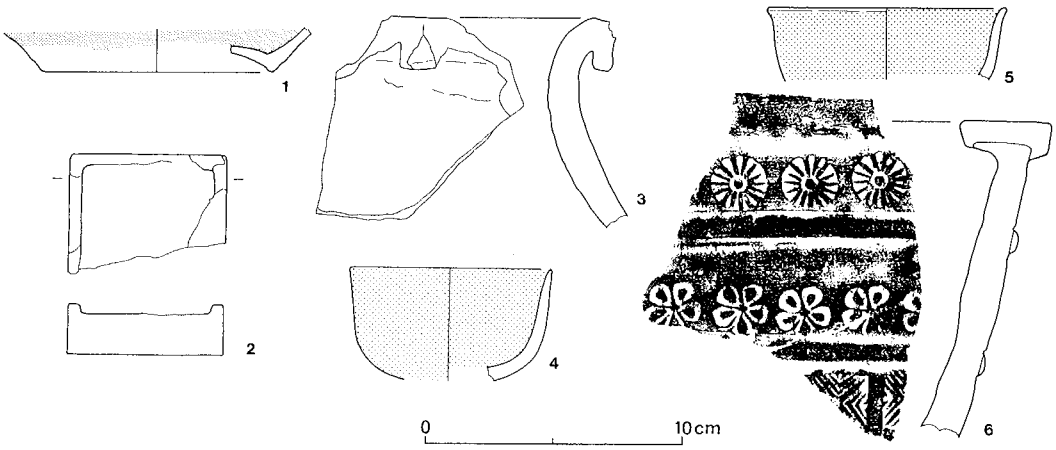


第4図　A区全測図（1/160）



1、黒褐色土（ローム粒子をわずかに含む）
2、　〃　（1より明るい。灰色粘土をわずかに含む）
3、　〃　（1より暗い。灰色粘土を含む）
4、灰褐色土（灰色粘土を多く含む）

第5図　A区の遺構（1/60）



第６図　Ａ区出土遺物（1/3）

している。石質は砂岩である。

○内堀第２トレンチ出土遺物（第６図３～６）

３．常滑系の瓶の口縁部破片であろう。図の内面下位に指の押圧痕がある。釉は認められない。焼成はあまり良くなく、部分的に土師質になっている。外面は淡小豆色～灰色、内面は淡小豆色を呈する。

４．磁器の湯呑みである。推定口径８cm。体部は直線的に立ち上り、口唇部は細い。内外面とも透明な灰釉が施されている。胎土は微細で淡緑灰色を呈する。

５．磁器の湯呑みである。推定口径9.5cm。口唇部はわずかに外反する。釉は淡緑色を呈し比較的薄く施されている。胎土は微細で白色を呈する。

６．角火鉢の破片であろう。口唇部は帯状の粘土板を水平に乗せ、下からナデつけて成形している。外面は貼付による突帯の間に刻印による花文が並んでいる。内面は横ナデだがあまり丁寧には調整されていない。胎土は砂・小石を含み、焼成は良好で土師質である。

Ⅵ．Ｂの遺構と出土遺物

１．遺構

○第１号土坑（第８図）

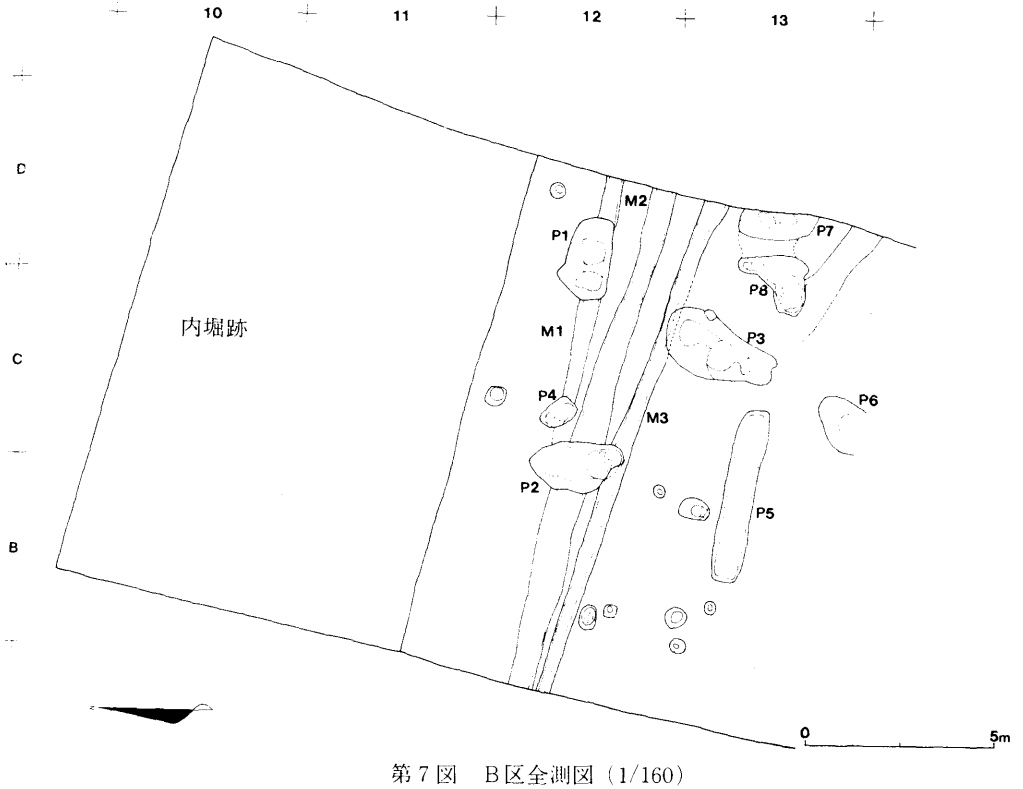
12―Ｃグリッドに位置し、第１号溝状遺構を切っている。平面プランは1.8×1.0ｍの不整形を呈し、深さは約60cmである。底部は中央が高く、その両側が擂鉢状に深くなっていた。

○第２号土坑（第８図）

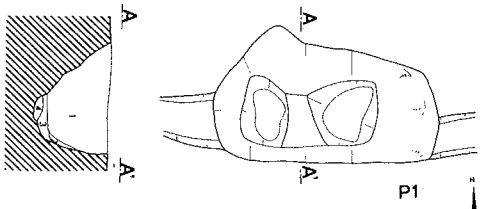
12―Ｂ・Ｃグリッドに位置し、第２号溝状遺構を切り、第３号溝状遺構に切られている。平面プランは2.0×1.1ｍの不整形を呈し、深さは約50cmである。南端の一部が擂鉢状に深くなっており、深さは約80cmである。

○第３号土坑（第８図）

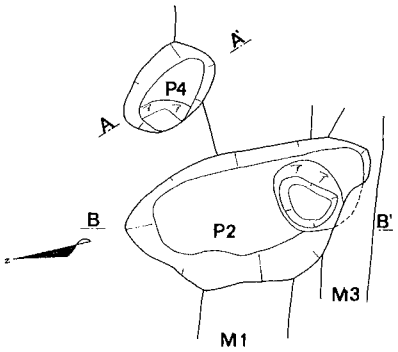
12・13―Ｃグリッドに位置し、第３号溝状遺構に切られている。平面プランは2.4×1.2ｍほどの不整形を呈する。底面は凹凸が激しく、南側の方が深くなっており、深さは最も深い部分で約70cmである。

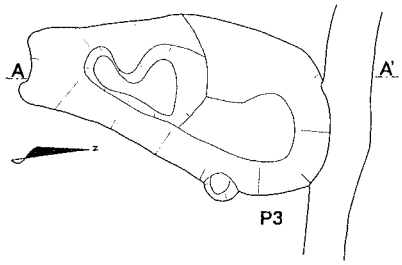


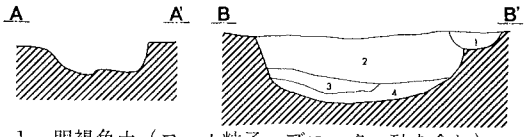
第７図　Ｂ区全測図（1/160）



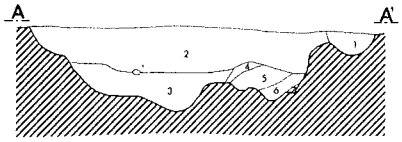
1、黒褐色土（ローム粒子、砂を含む）
2、灰褐色土（砂を含む）
3、黄褐色土（ローム粒子、黄白色粘土を含む）
4、灰褐色土（2に類似、砂を含む）



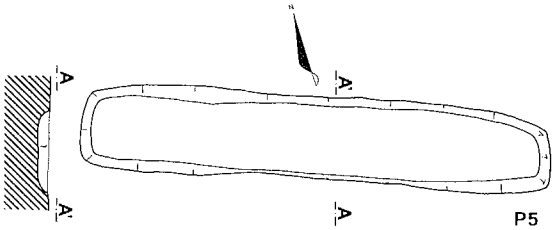




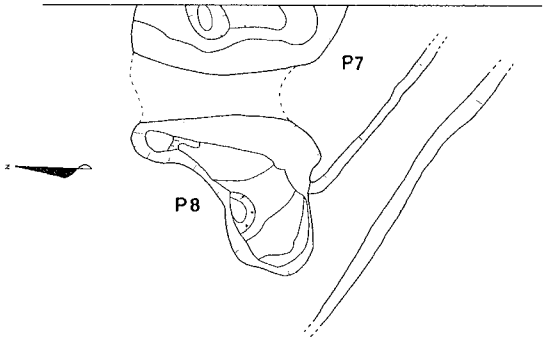
1、明褐色土（ローム粒子・ブロック、砂を含む）
2、暗褐色土（ローム粒子・砂を含む）
3、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
4、　〃　（ローム粒子・ブロックを含む）

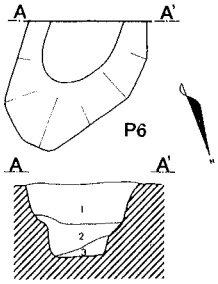


1、黒色土（ローム粒子、ブロックを含む）
2、黒褐色土（ローム粒子、砂を含む）
3、黒色粘質土
4、暗褐色土（ローム粒子、砂を含む）
5、黄褐色土（ローム粒子、黄白色粘土粒子含む）
6、黒褐色土
7、灰白色粘土ブロック



1、黒灰色土（ローム粒子・ブロックを含む）





1、黒褐色土（ローム粒子を含む）
2、黒色粘質土（ローム粒子を少量含む）
3、　〃　（灰白色粘土を含む）

0　2m

第8図　B区の遺構（1/60）

○第４号土坑（第８図）

12―Ｃグリッドに位置し、第１号溝状遺構を切っている。平面プランは0.8×0.6ｍほどの長円形を呈し、深さは約30cmである。底面は段差があり、北端部が最も深くなっている。

○第５号土坑（第８図）

13―Ｂ・Ｃグリッドに位置する。平面プランは3.7×0.7ｍほどの長方形を呈する。深さは約10cmで底面は平坦である。端部はさらに若干浅くなっており、溝状遺構の痕跡である可能性もある。

○第６号土坑（第８図）

13―Ｃグリッドに位置する。全体の形態は不明だが、幅約１ｍ、深さは約60cmである。底面は比較的平坦である。

○第７号土坑（第８図）

13―Ｄグリッドに位置する。全体の形態は不明だが、深さは約50cmで、底面は凹凸が激しい。

○第８号土坑（第８図）

13―Ｃ・Ｄグリッドに位置する。1.7×1.0ｍほどの不整形を呈し、深さは約60cmで、底面は凹凸が激しい。

○溝状遺構（第７図）

12グリッド内を東西に３条の溝条遺構が平行するように横断しており、北から第１号、第２号、第３号とした。第１号溝条遺構は第４号土坑付近ではっきりしなくなる。いずれも深さは10～20cmほどであるが、幅は第１号溝状遺構が40～50cm、第２号溝状遺構が50～90cm、第３号溝状遺構が40～50cmである。いずれも構築時期は近世と思われ、第３号は第２号よりも新しいものである。

２．出土遺物

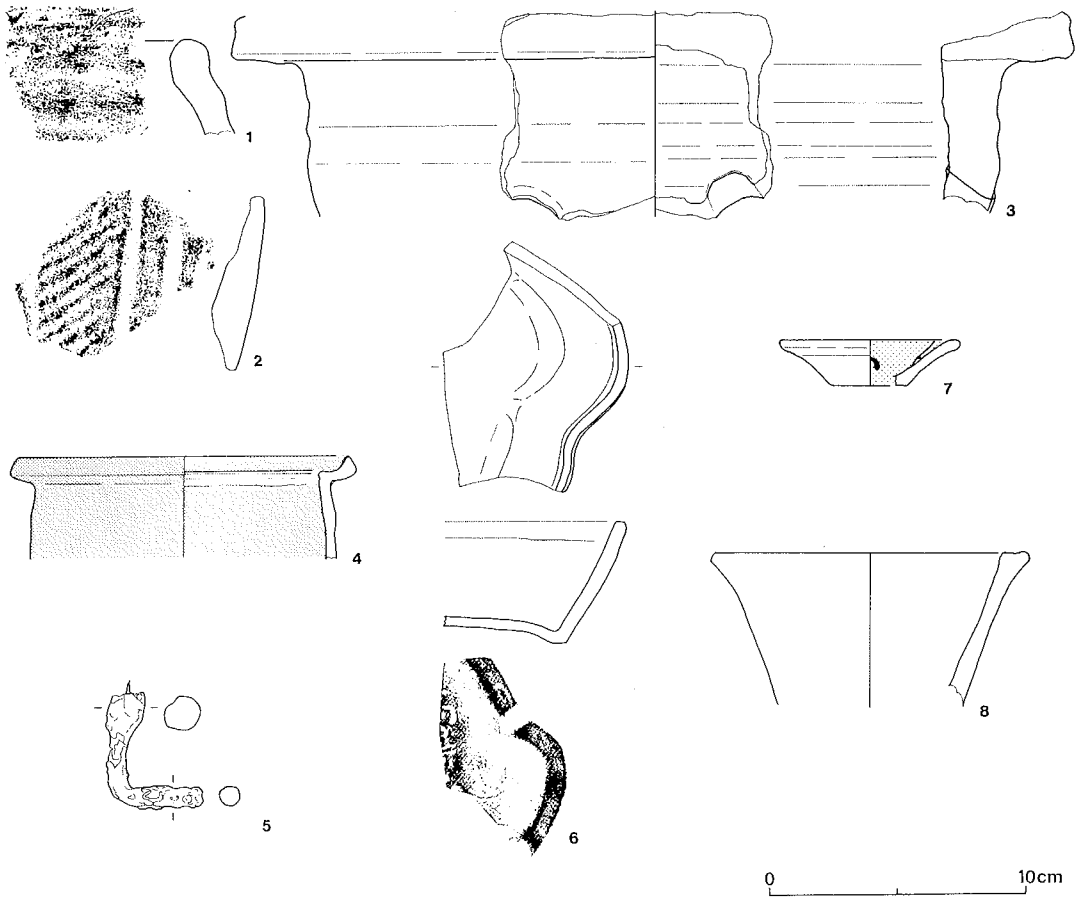
○第１号土坑出土遺物（第９図）

１．縄文土器の口縁部破片である。加曽利Ｅ式と思われ、微隆線による文様が認められる。焼成やや不良、淡橙褐色を呈する。

○第３号土坑出土遺物（第９図２・３）

２．縄文土器の破片である。器面はかなり磨滅しているが、縄文はＲＬ単節で、垂下する平行沈線間は磨消されている。焼成良、淡褐色を呈する。

３．土師質の火器であろう。直線的な体部の上に粘土板を乗せて鍔状の部分を作っており、体部に通気用と思われる孔がある。鍔状の部分の推定径は33cm。ロクロ調整痕は内外面とも明瞭。焼成



第９図　Ｂ区の出土遺物（1/3）

良、外面淡橙色、内面灰白褐色を呈する。

○第３号溝状遺構出土遺物（第９図４・５）

４．鉢形の陶器であろう。蓋のつくものと思われる。推定口径13.5cm。内部の受部を除き色の薄い黄褐釉が施されており、貫入が認められる。胎土は微細で黄白色を呈し、焼成は堅緻である。

５．鉄製の灯明具である。蠟燭を立てたものであろう。全体は腐蝕が激しい。

○内堀出土遺物（第９図６・７）

６．磁器の飾り鉢と思われる。器高5.0cm。口唇部上面は平坦で、体部は外傾し、底部は上げ底状になっている。底面を除き透明な灰釉が施されている。底面はには“高崎”と思われる刻印がある。胎土は微細で淡灰白色を呈し、焼成は堅緻である。

７．磁器の小物である。推定口径７cm、器高1.8cm。体部は少し外反する。底面及び外面は素地のままであるが、内面は鉄絵と灰釉が施されており、貫入が認められる。胎土は微細で灰褐色を呈

し、焼成は堅緻である。

○グリッド出土遺物（第９図８）

８．瓦質の土器であるが、器形は不明である。推定口径12.5cm。体部は直線的に外傾し、口唇部は外反気味に肥厚している。焼成良、黒色を呈する。

Ⅶ．Ｃ区の遺構と出土遺物

１．遺構

○第１号土坑（第11図）

22―Ｂグリッドに位置する。全体は発掘できなかったが、径約１ｍの円形を呈するものと思われる。深さは約60cmで筒状を呈し、底は平坦である。

○第２号土坑（第１図）

22―Ｂグリッドに位置する。全体は発掘できなかったが、約２分の１の調査をしえたものと思われる。全体は皿状を呈し、深さは約40cmである。平面プランは、西側が円形状を呈し、東側は浅い突出した部分となっている。

○第３号土坑（第11図）

22―Ｂグリッドに位置する。土坑２基の切り合いに柱穴が絡んでいる。東側の平面プランが1.3×0.8ｍ、深さ約15cmの土坑が、西側の平面プランが2.0×1.1ｍ、深さ約50cmの土坑を切っている。西側の土坑は底が平坦であるが、東側の土坑は底にやや傾斜がある。

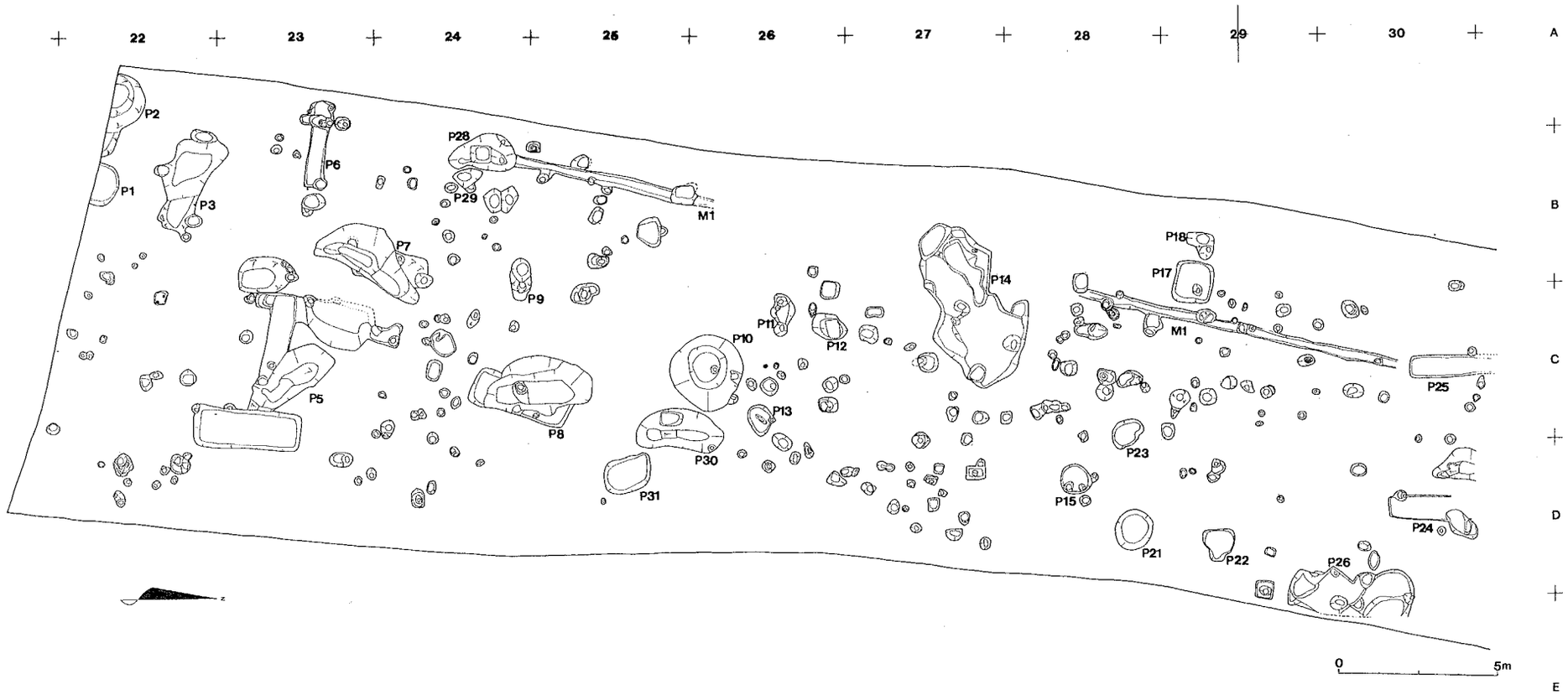
○第５号土坑（第11図）

21―Ｃグリッドに位置する。土坑５基の切り合いに柱穴が絡んでいる。

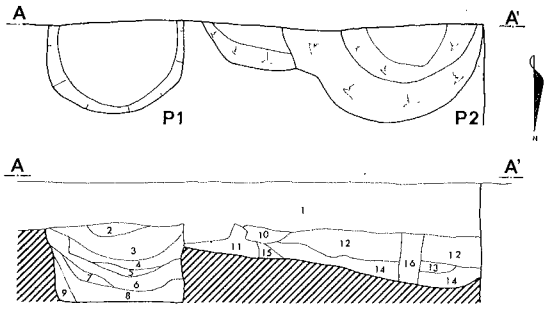
最も東側の土坑は、2.8×1.0ｍほどの長方形を呈し、南北方向を向いている。深さは約40cmで、底面は比較的平坦である。

その西側の土坑は、2.2×1.0ｍほどの不整形を呈する。深さは約40cmで、全体は擂鉢状を呈する。

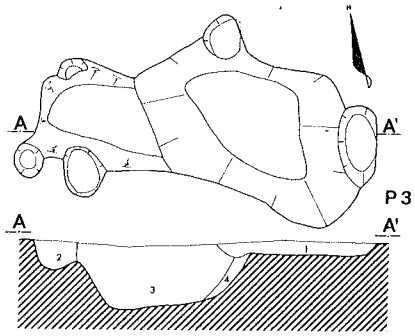
中央の土坑は、長さは不明だが、幅約0.7ｍの東西方向の長方形を呈する。深さは約30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上る。



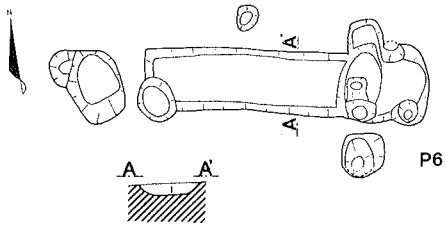
第10図　C区全測図（1/160）



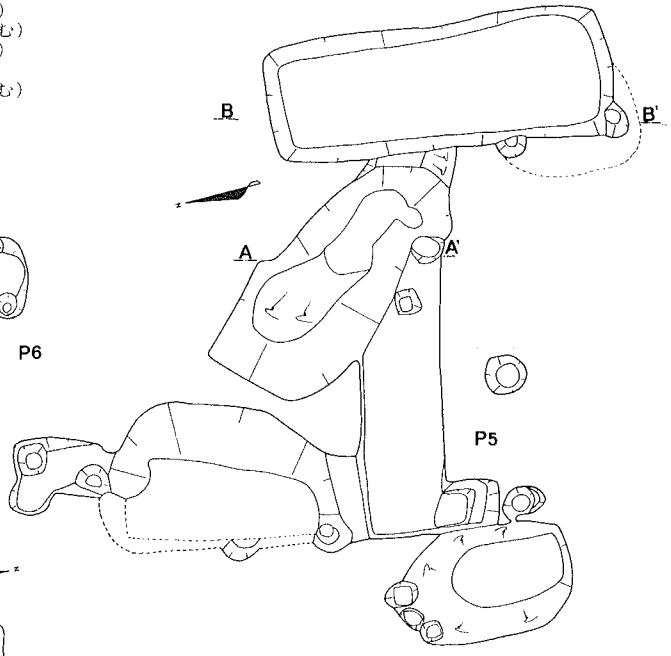
1、表土（黒色土）
2、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
3、黄白色粘土（ブロック状に多量に含まれる）
4、黒色土（ローム粒子を少量含む）
5、　〃　（砂質の明褐色土を含む）
6、　〃
7、明褐色土（砂質）
8、黒色土（砂質の明褐色土粒子を多く含む）
9、　〃　（ローム粒子・ブロックを少量含む）
10、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
11、黄褐色土
12、明褐色土（ローム粒子、砂、黒色土を含む）
13、暗褐色土（ローム粒子、砂を含む）
14、黒色土（ローム粒子、砂を含む）
15、暗褐色土（ローム粒子、砂を含む）
16、黒褐色土（ローム粒子、砂を含む）

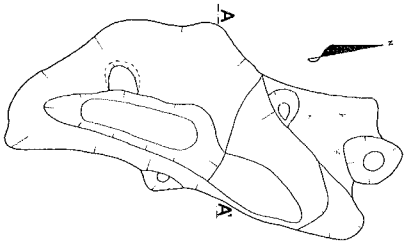


1、黒褐色土（ローム粒子・ブロック、焼土、炭化物を含む）
2、　〃　（ローム粒子・ブロックを含む）
3、黒色土
4、明褐色土

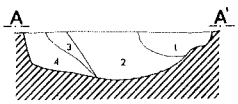


1、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを含む。焼土、炭化物を多く含む）

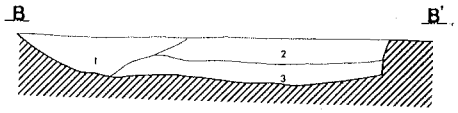




1、黒色土（ローム粒子を含む）
2、明褐色土



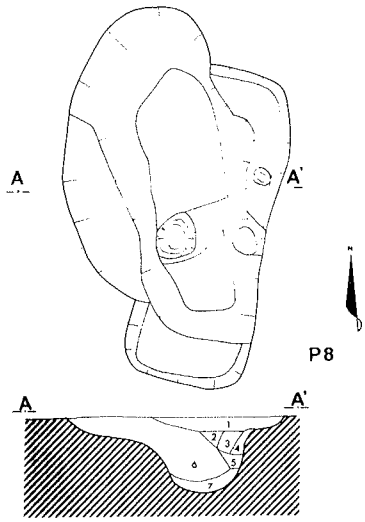
1、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
2、黒色土
3、暗褐色土（ローム粒子を含む）
4、明褐色土（灰色粘土を含む）



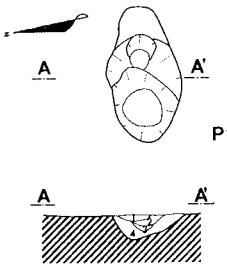
1、黒色土（ローム粒子・ブロックを含む）
2、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
3、黒色土（ローム粒子・ブロックを極めて多量に含む）

0　2m

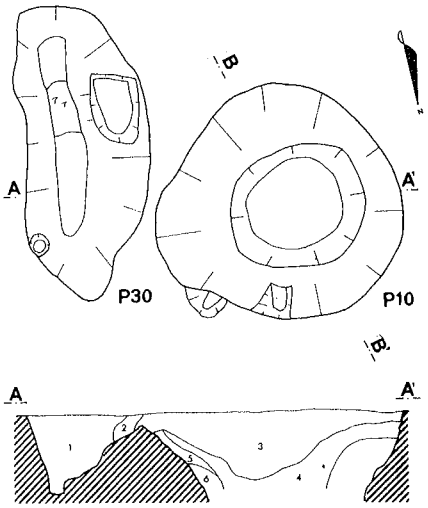
第11図　C区の遺構(1)（1/60）



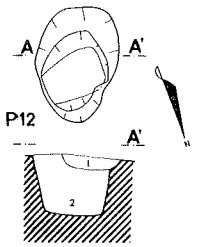
1、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
2、黒灰色土
3、暗灰褐色土（ローム粒子を含む）
4、明褐色土（ローム粒子を含む）
5、暗灰褐色土（3より暗い）
6、黒色土（ローム粒子を少量含む）
7、暗褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）



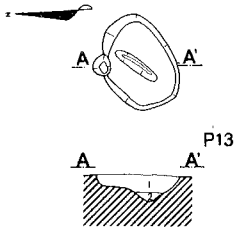
1、黒灰色土（焼土を含む）
2、〃（焼土、炭化物を含む）
3、黒色土（焼土ブロック、黄白色焼土ブロックを含む）
4、〃（焼土、炭化物を少量含む）



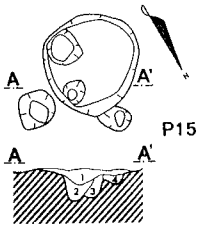
1、黒色土
2、黒褐色土（黄白色粘土ブロックを含む）
3、黒色土（焼土、炭化物を含む）
4、黒灰色土（ロームブロック、粘土ブロックを多く含む）
5、〃
6、〃（ロームブロック、粘土ブロックを含む）
7、黒色土（ロームブロックを少量含む）



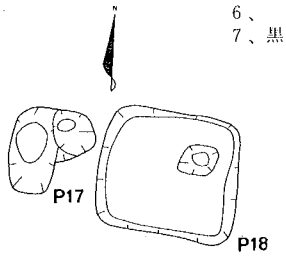
1、黒色土
2、〃（ローム粒子・ブロックを多量に含む）

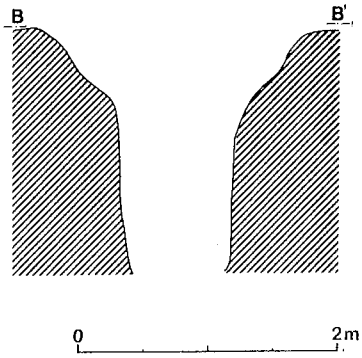


1、黒褐色土（ロームブロック、燃土、炭化物を多く含む）
2、黒灰褐色土（燃土、炭化物を多く含む）



1、黒褐色土（ロームブロック、焼土、炭化物を含む）
2、〃（1より暗い。ロームブロック、焼土、炭化物を含む）
3、黄褐色土（ロームブロックを多く含む）
4、黒色土（ローム粒子を少量含む）





第12図　C区の遺構(2)（1/60）

南西隅の土坑は、1.4×0.9mほどの長円形状を呈しする。深さは約20cmで、全体は皿状を呈する。

北西隅の土坑は、一部に攪乱を受けており形状は不明であるが、1.8×1.2mほどの不整形を呈するものと思われる。深さは約50cmで、底は舟底状を呈する。

○第6号土坑（第11図）

21―Bグリッドに位置する。土坑2基以上の切り合いに柱穴が絡んでいる。

西側の土坑は、1.7×0.5mほどの東西方向の長方形を呈し、深さは約15cmで、底は舟状を呈する。その東に深さ約50cmの柱穴状の深い部分があり、さらに径約0.6m深さ約20cmの底が平坦な不整円形状を呈する。

○第7号土坑（第11図）

20・21―Bグリッドに位置する。平面プランは2.9×1.3mほどの不整形を呈する。深さは最も深い部分で約80cmである。底は全体に舟底状を呈するが、凹凸が激しく、部分的に段状になっている。

○第8号土坑（第12図）

19・20―Cグリッドに位置する。土坑2基以上の切り合いである。2.6×1.6mほどの不整長円形を呈する深さ約60cmの土坑を、2.5×0.9mほどの長方形を呈する深さ約10cmの土坑が切っている。不整長円形の土坑は、東側が浅く広がっており、底は舟底状を呈する。長方形の土坑の底はほぼ平坦である。なお、柱穴が3基ほど絡んでいる。

○第9土坑（第12図）

20―Bグリッドに位置する。径約0.5mの不整円形を呈し、深さは約40cmである。東へ浅く広がっており、土師器甕の破片などが出土した。

○第10号土坑（第12図）

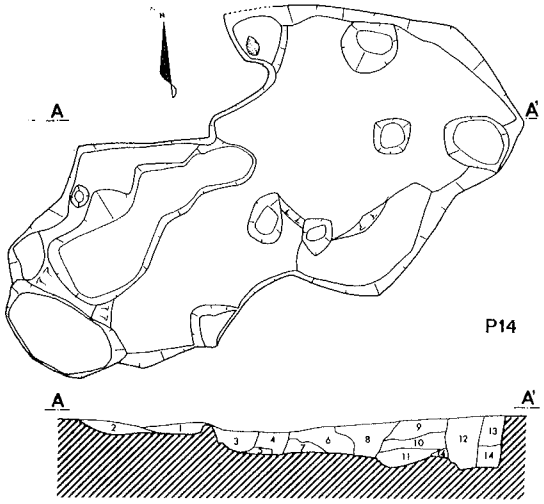
18・19―Cグリッドに位置する。井戸跡と思われる。径約1.5mの不整円形を呈する。深さは確認できなかったが、2m以上あるものと思われる。壁の中位に稜を有し、全体の形状はロート状を呈するものと思われる。

○第11号土坑（第12図）

18―Cグリッドに位置する。1.0×0.8mほどの不整形を呈し、深さは約30cmである。底面は凹凸が激しい。柱穴が2基絡んでいる。

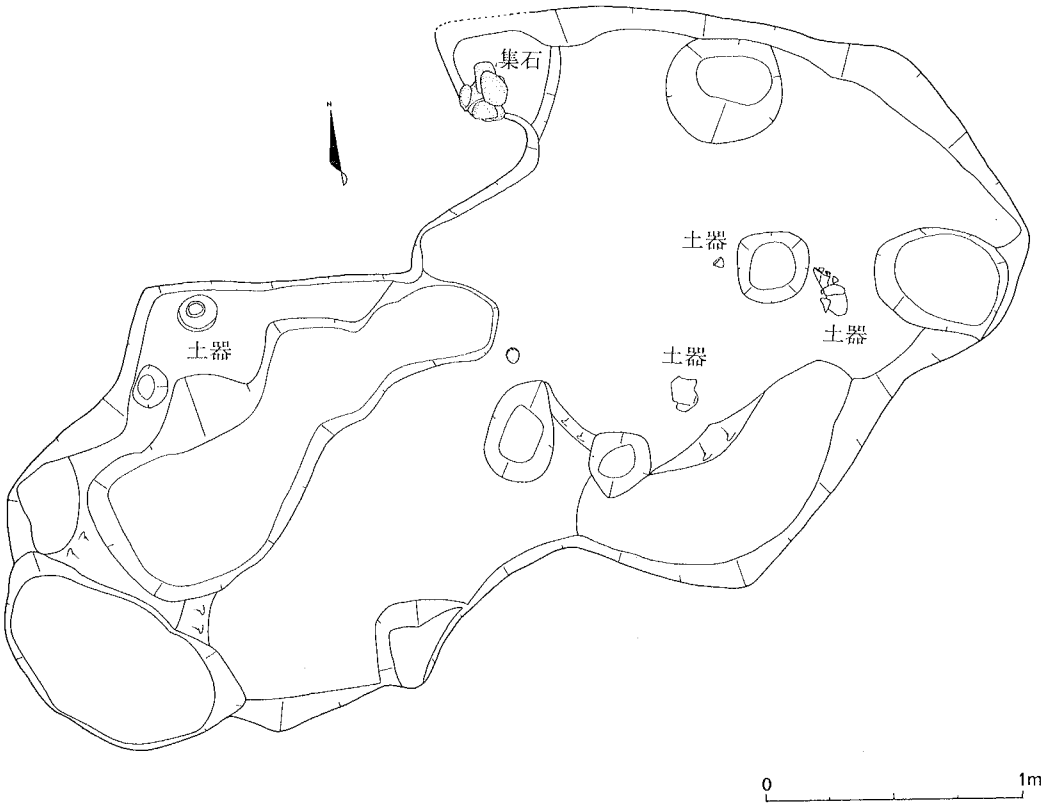
○第12号土坑（第12図）

18―Cグリッドに位置する。0.9×0.7mほどの長円形状を呈し、深さは約50cmである。壁の中位に稜を有し、底面は比較的平坦である。

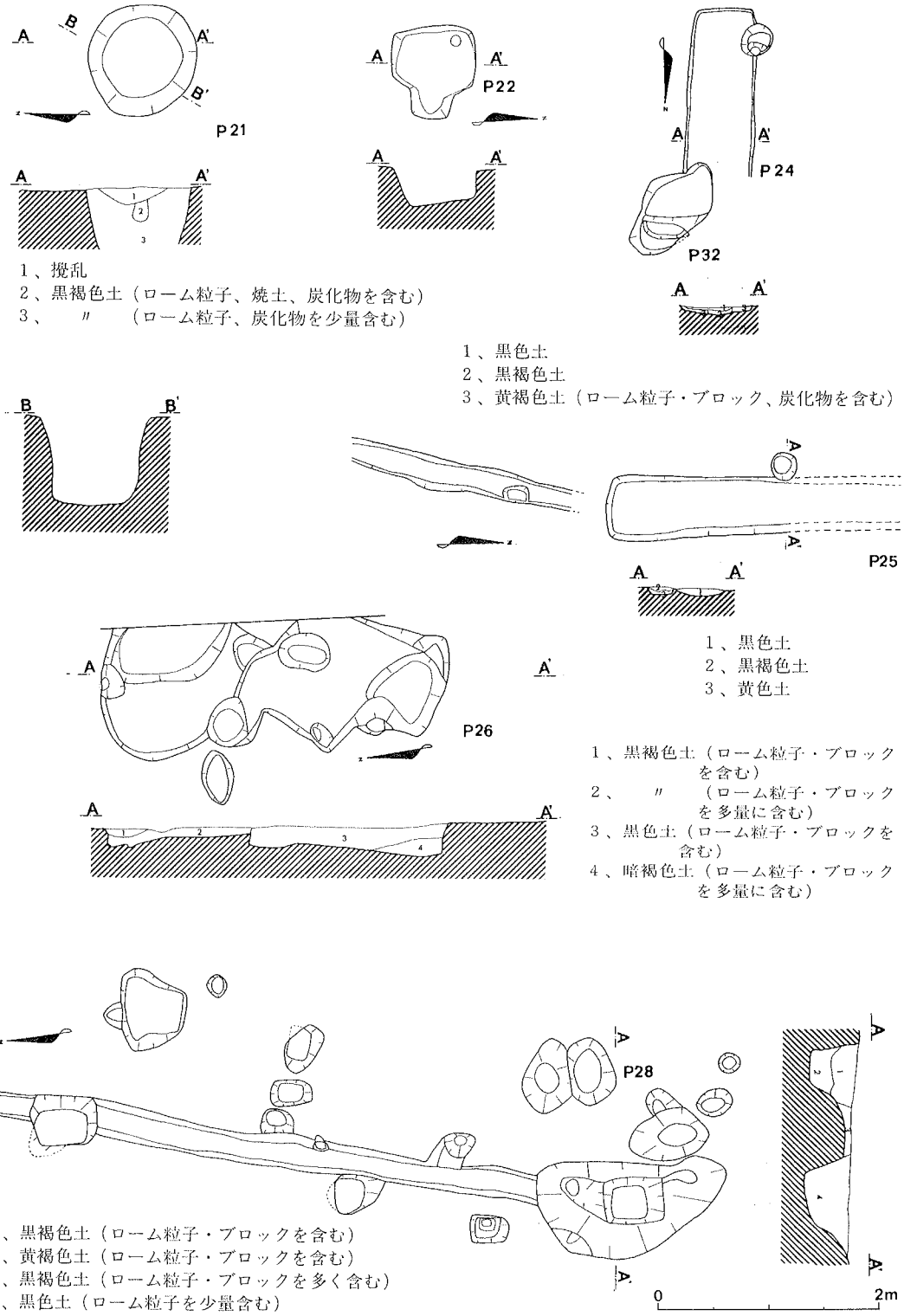


1、黒色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
2、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
3、黒色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
4、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
5、黄白色粘土ブロック
6、黒色土（ロームブロック、炭化物を含む）
7、黄色土（黄白色粘土ブロックを多量に含む）
8、黒色土（ローム粒子を少量含む）
9、　〃　（8より明るい）
10、黒褐色土（ロームブロックを多く含む）
11、　〃　（ローム粒子・ブロックを含む）
12、黒色土（ローム粒子を少し含む）
13、　〃　（ローム粒子を少量含む）
14、黄色土（黄白色粘土を多量に含む）

0　2m



第13図　C区の遺構(3)（1/60・1/30）



第14図　C区の遺構(4)（1/60）

○第13号土坑（第12図）

18―Ｃグリッドに位置する。0.8×0.6ｍほどの長円形状を呈し、深さは約15cmである。底面はほぼ平坦であるが、中央に細長い窪みがある。

○第14号土坑（第13図）

17―Ｂ・Ｃグリッドに位置する。平面プランは、4.3×2.5ｍほどの複雑な形態を呈するが、土坑数基の切り合いとみられ、一部に攪乱を受けている。深さは、最も深い部分で約40cm、最も広い平面部で20～25cmである。北端部には河原石を集めた部分があった。土師器甕の破片、須恵器高台付坏が出土している。

第15号土坑（第12図）

16―Ｄグリッドに位置する。径約0.8ｍの円形状を呈し、柱穴が絡んでいる。深さは約10cmで、底面は比較的平坦である。

○第17号土坑（第12図）

15―Ｂグリッドに位置する。平面プランが0.7×0.4ｍほどの柱穴状の土坑に柱穴が絡んでいる。深さは約30cmである。

○第18号土坑（第12図）

15―Ｂ・Ｃグリッドに位置する。平面プランは1.1×1.0ｍほの正方形状を呈し、深さは約20cmである。底面は平坦である。

○第21号土坑（第14図）

16―Ｄグリッドに位置する。平面プランは径1.0ｍほどの円形を呈する。深さは約80cmで、底面はほぼ平坦である。

○第22号土坑（第14図）

15―Ｄグリッドに位置する。平面プランは0.9×0.8ｍほどの凹形を呈する。深さは約40cmで、底面は平坦だが、やや斜めになっている。

○第24号土坑（第14図）

14―Ｄグリッドに位置する。長さは不明だが、幅0.6ｍほどの長方形を呈する。深さは約10cmで、底面はほぼ平坦である。

○第25号土坑（第14図）

14―Ｃグリッドに位置する。長さは不明だが、幅0.6ｍほどの長方形を呈する。深さは約10cmで、

底面は舟底状を呈するようである。

○第26号土坑（第14図）

14・15―D・Eグリッドに位置する。少なくとも土坑3基以上の切り合いと思われ、柱穴が絡んでいる。南側の土坑は、1.0×1.1mほどの正方形状を呈するものと思われ、深さは20～30cmで、底面は比較的平坦である。北側の土坑は南側のものに切られているが、幅1.3mほどの長円形状を呈するものと思われ、深さは西半が約15cm、東半が約10cmである。

○第27号土坑（第14図）

20―Bグリッドに位置する。平面プランは0.7×0.4mほどの卵形を呈し、深さは約40cmである。

○第28号土坑（第14図）

20―Bグリッドに位置する。平面プランは1.7×0.9mほどの不整形を呈し、深さは約40cmである。壁面及び底面には凹凸がある。

○第30号土坑（第12図）

18・19―C・Dグリッドに位置する。平面プランは2.4×1.0mほどの不整形を呈し、深さは約60cmである。底面は細長く、壁は斜めに立ち上る。

○第1号溝状遺構（第14図）

B・Cグリッド内を、調査区と同じ南北方向に延びている。幅30～40cm、深さ約10cmのごく小規模なものである。

2．出土遺物

○第8号土坑出土遺物（第15図1・2）

1．瓦質の内耳土鍋の口縁部内面に橋状に貼り付けられた内耳部分の破片である。外面内耳貼付部分の下が強く押圧されている。外面に炭化物がわずかに付着、焼成良好、黒灰色を呈する。

2．土師質皿の破片である。推定口径8.0cm、器高1.9cm、推定底径5cm強。灯明皿として使用されたものであろう。口唇部に油煙が付着している。底面は回転糸切り。焼成良、淡橙褐色を呈する。

○第9号土坑出土遺物（第15図3～5）

3．土師器甕の下半部である。底径4.5cm、残存高9.3cm。器内はかなり薄い。外面は磨滅が激しいが、縦又は斜めのヘラ削りのようである。内面はよくナデられている。焼成良、外面暗褐色。

4．須恵器皿の破片である。推定口径15cm。体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反している。焼成良好、灰色を呈する。

5．須恵器高台付皿の低部破片であろう。底径7.1cm、残存1.8cm。底面は回転糸切り、高台は貼付である。高台の接地面に細い沈線が巡っている。焼成良好、淡灰色を呈する。

○第10号土坑出土遺物（第15図７～10）

7．石皿の破片と思われる。図の上面及び下面に磨かれたような使用痕が認められ、側面は平坦に成形されている。表面の気泡内に炭化物が少量認められ（特に図の上面が顕著）、全体に黒ずんでいる。石質は輝石安山岩。

8．須恵器高台付坏の底部破片である。推定底径7.5cm。底面は回転糸切りのようであるが磨滅のためはっきりしない。高台は貼付。焼成はやや不良で軽質、淡灰褐色を呈する。

9．瓦質の鉢の破片である。推定口径31cm。体部から口縁部にかけては外反して開き、体部は丸みをもっていたものと思われる。口唇部は丸く、内側が沈線状に屈曲している。焼成良、灰白色を呈する。

10．鉢形を呈する須恵器の口縁部破片である。推定口径19cm。丸い口唇部はわずかに外反している。口唇部にごくわずかに薄く自然釉がかかっている。焼成良好、外面灰色、内面灰白色を呈する。

○第11号土坑出土遺物（第15図11）

11．須恵器坏の破片である。推定口径11.5cm。体部は直線的に外傾し、器肉はやや厚い。焼成やや不良、灰白色を呈する。

○第14号土坑出土遺物（第15図12～14）

12．土師器甕の底部破片である。底面は剝離している。外面は縦のヘラ削り、内面は横のヘラナデ。焼成良、明褐色を呈する。

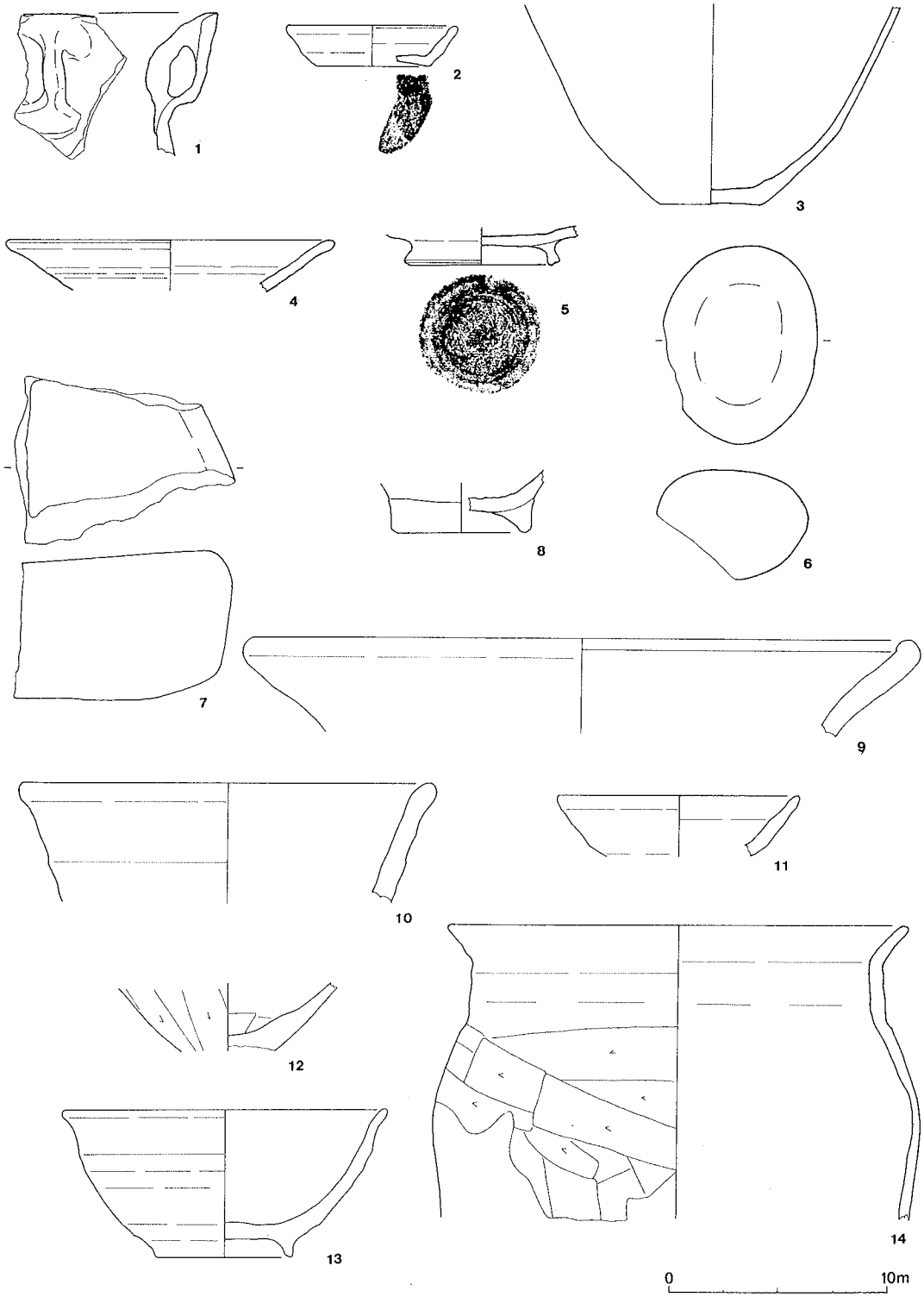
13．須恵器高台付坏である。ほぼ完形。口径14.8cm、器高6.8cm、底径6.1cm。口唇部はわずかに外反している。高台は削り出し、底面はナデられている。ロクロは左回転。器面はかなり磨滅。焼成やや不良で軽質、淡灰褐色を呈する。

14．土師器甕の上半部である。推定口径21.0cm、残存高13.5cm。いわゆる「コ」字状口縁の甕である。体部の器肉はかなり薄く、肩部が若干張っておいる。外面はヘラ削り、内面はヘラナデであろう。器面は全体にやや磨滅している。焼成良、橙褐色～暗褐色を呈する。

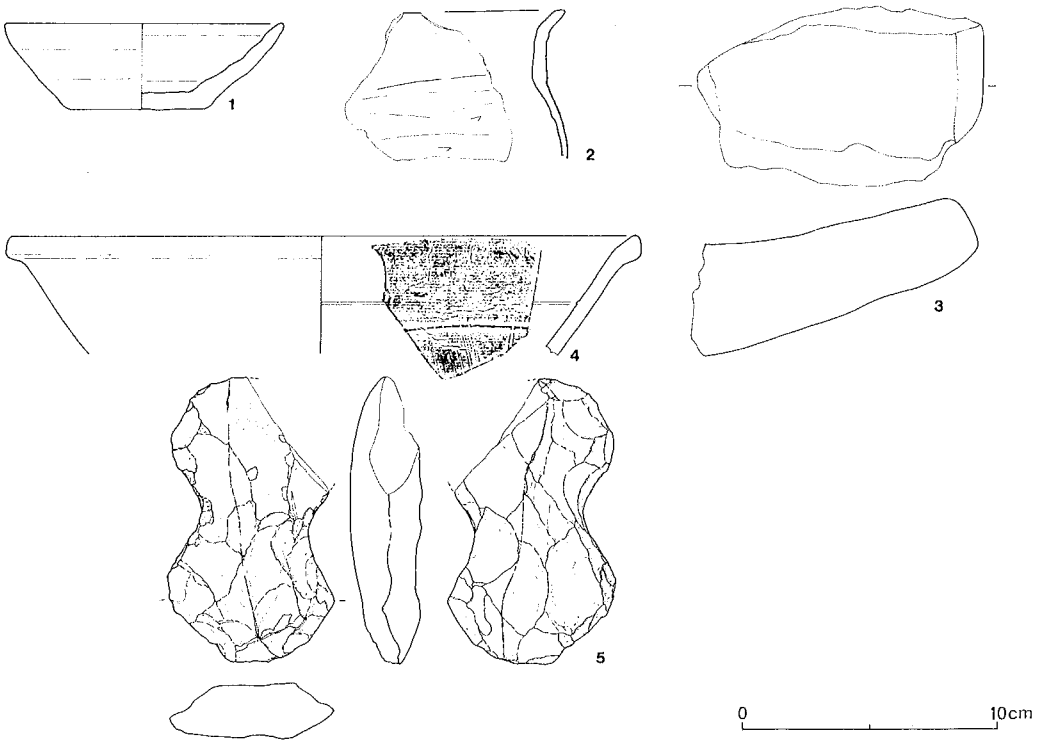
○第21号土坑出土遺物（第15図６）

6．磨石である。長さ9.3cm、幅7.2cm、厚さ5.0cm。長円形を呈し、図の上面が磨面となっている。石質はスコリア質の輝石安山岩である。

○第22号土坑出土遺物（第16図１）



第15図　C区の出土遺物(1)（1/3）



第16図　C区の出土遺物(2)（1/3）

1．土師質皿である。口径11.1cm、器高3.4cm、底径5.4cm。やや扁平な形態を呈する。器面はかなり磨滅しており、底面は回転糸切りと思われるが不明。ロクロは右回転。焼成やや不良、黄白色～淡橙色を呈する。

○第27号土坑出土遺物（第16図２）

2．土師器甕の口縁部破片である。いわゆる「コ」字状口縁。器肉はかなり薄い。口縁部は横ナデ胴部外面は横のヘラ削り。器面かなり磨滅。焼成良、暗褐色を呈する。

○第５号土坑出土遺物（第16図５）

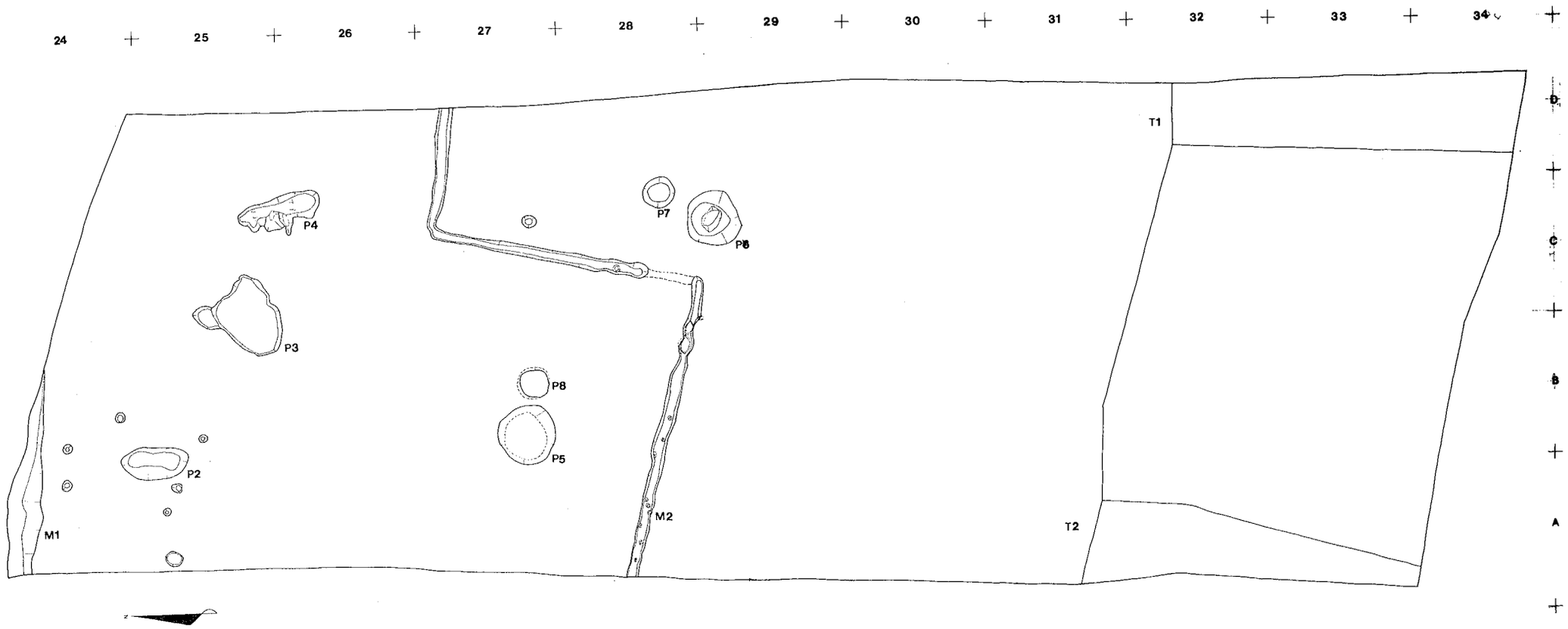
5．いわゆる分銅型の打製石斧である。長さ11.4cm、刃幅6.5cm、厚さ2.7cm。器面はかなり風化しており、剥離の状況はやや不明瞭である。石質はホルンフェルス。

○第１号土坑出土遺物（第16図３）

3．茶臼の破片である。下臼の鍔状の受皿部分の破片であろう。石質は輝石安山岩である。

○グリッド出土遺物（第16図４）

4．磁器質の擂鉢である。推定口径25cm。口唇部は外反して肥厚。焼成堅緻、濃褐色を呈する。



第17図　D区全測図（1/160）

Ⅷ．Ｄ区の遺構と出土遺物

１．遺構

○第２号土坑（第18図）

24・25―Ｂグリッドに位置する。平面プランは2.0×0.9ｍほどの長円形状を呈し、深さは約40cmである。底面は舟底面状を呈し、壁は斜めに立上る。

○第３号土坑（第18図）

25―Ｂ・Ｃグリッドに位置する。平面プランは2.4×1.6ｍほどの不整形を呈し、深さは15～20cmである。底面は比較的平坦である。

○第４号土坑（第18図）

25・26―Ｃグリッドに位置する。平面プランは2.4×1.0ｍほどの不整形を呈し、深さは30～40cmである。底面及び壁面は凹凸が激しい。

○第５号土坑（第18回）

27―Ｂグリッドに位置する。井戸跡であろう。平面プランは1.7×1.6ｍほどの円形状を呈する。深さは出水等により確認できなかっがた、２ｍ以上に達する。壁はやや斜めに立上る。

○第６号土坑（第18図）

28・29―Ｃグリッドに位置する。平面プランは1.6×1.5ｍの不整円形状を呈し、深さは約80cmである。全体は擂鉢状を呈し、中央がやや深くなっている。

○第７号土坑（第18図）

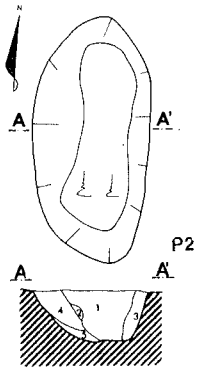
28―Ｃグリッドに位置する。平面プランは径0.9ｍほどの円形を呈する。深さは出水等のために確認しえなかったが、１ｍ以上に達するようである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

○第８号土坑（第18図）

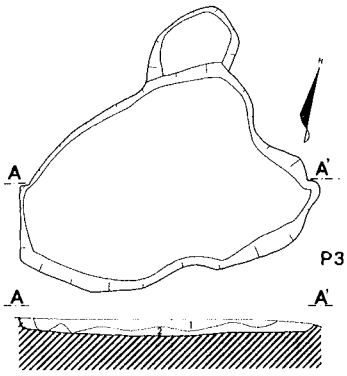
27―Ｂグリッドに位置する。平面プランは径0.8ｍほどの円形状を呈する。深さは出水等のために確認しえなかった。１ｍ以上に達するようである。壁は下へ向うに従い少しずつ広がっており、若干の袋状を呈する。

○第１号溝状遺構（第19図）

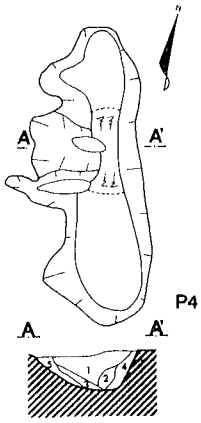
Ｄ区の西北隅に位置し、東西に走っているようである。ごく一部のみを発掘しえたのみであるた



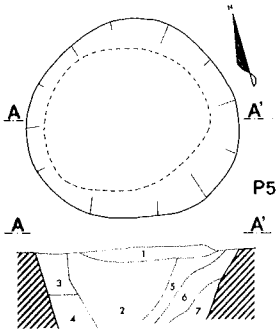
1、黒色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
2、明褐色土（砂質）
3、暗褐色土（砂質）
4、黄白色粘土（ローム質）
5、黄褐色土（明褐色砂質土、黄白色粘土を含む）



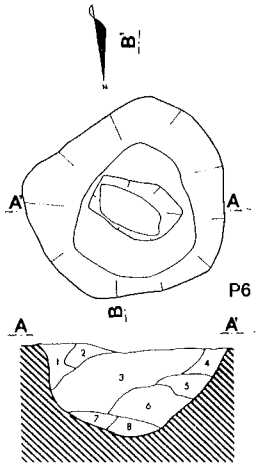
1、黒褐色土（黄白色粘土ブロックを多量に含む）
2、明褐色土（砂質）



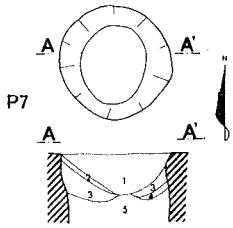
1、黒色土（ローム粒子を少量含む）
2、明褐色土（ローム粒子、黄白色粘土を含む）
3、黒褐色土（ローム粒子、黄白色粘土ブロックを含む）
4、黄白色粘土
5、黒色土



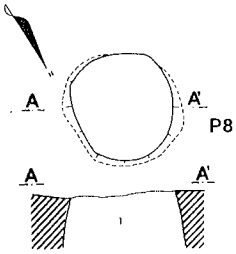
1、灰色粘土（礫を含む）
2、　〃　（1より明るい。砂・礫を含む）
3、黒色土（灰色粘土・砂・石を含む）
4、明褐色土（黄白色粘土・黒色土を含む）
5、黒灰色粘土（灰色粘土を含む）
6、黒色粘質土（灰色粘土を含む）
7、明褐色土（黄緑白色粘土を含む）



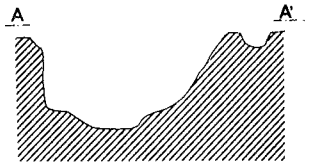
1、黄白色土（ロームブロック）
2、黒褐色土（ロームブロック、明褐色土を含む）
3、黒色土
4、黄色土（ロームブロック）
5、明褐色土（砂質）
6、黄色粘土（ローム質）
7、　〃　（ローム質、黒色土を含む）
8、黒色土（明褐色砂質土を含む）

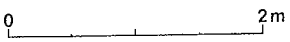


1、灰褐色粘質土（黄白色粘土を含む）
2、黒色土（灰褐色粘質土を含む）
3、灰褐色粘質土（1より暗い。灰褐色粘質土を含む）
4、黄白色粘質土
5、灰褐色粘質土（3より暗い。緑白色粘土を含む）

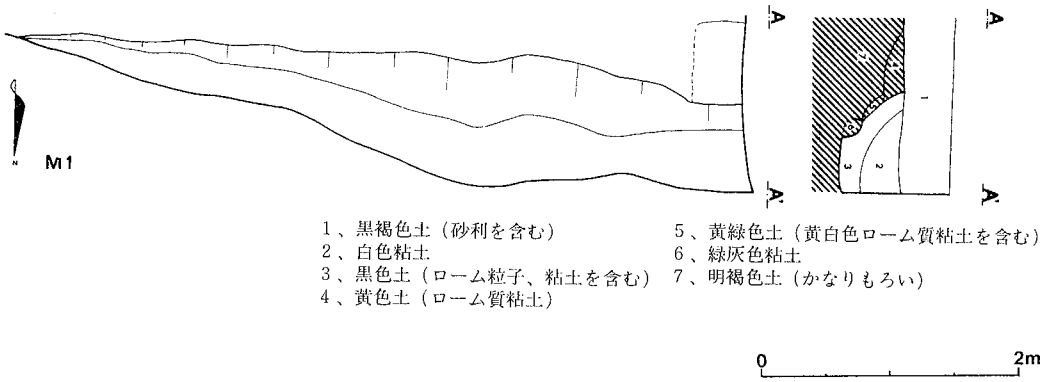


1、黄灰褐色粘質土（砂利を多量に含む）





第18図　D区の遺構（1/60）



第19図　D区の遺構(2)（1/60）

め、全体の形状は不明である。確認しえた部分での深さは約50cmで、壁は斜めに立ち上がる。底面は比較的平坦である。

○第２号溝状遺構（第17図）

D区の27・28グリッドを、東西にクランク状に横断している。幅30～50cm、深さ20～30cmほどの小さな溝状遺構であるが、中央部が長さ1.6ｍほど途切れている。底面は舟底状を呈するが、径10cmほの小ピットが散見される。28―Ａグリッドの隅には、深さ、約50cmほどの袋状になった部分が２ケ所認められる。板塀などの痕跡である可能性もあろう。

２．出土遺物

○第２号土坑出土遺物（第20図１）

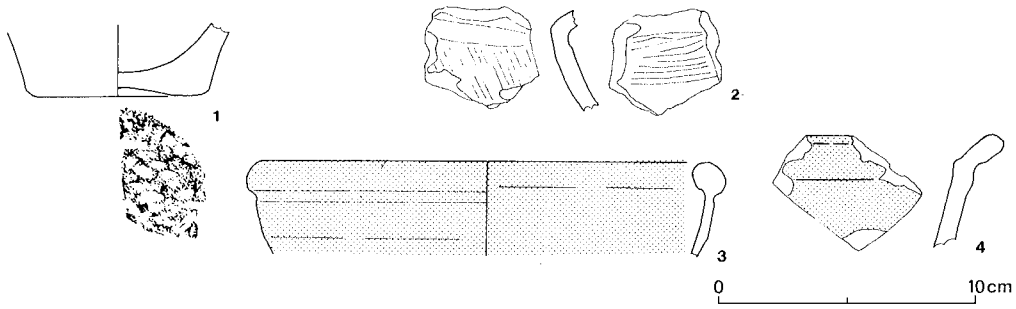
１．縄文土器の底部である。推定底径7.2cm。体部は外反して立ち上がり、凹面となっている底面には網代痕が認められる。焼成良、外面淡橙褐色、内面黒褐色を呈する。

○第５号土坑出土遺物（第20図２）

２．土師器甕の屈曲した頸部の破片である。内外面とも１cmあたり４～５本の間隔の広いハケ目調整の後、若干ナデられている。焼成良好、橙褐色を呈する。

○外堀第２トレンチ出土遺物（第20図４）

３．陶器鉢の破片であろう。口径は40cm前後になるものと思われる。口縁部は屈曲して外傾し、内面に稜を作る。頸部外面には沈線が巡る。内外面とも白濁した灰釉が施されている。胎土は黄白色を呈し、焼成は堅緻である。



第20図　D区の出土遺物（1/3）

○グリッド出土遺物（第20図４）

４．陶器片口の破片と思われる。推定口径17.5cm。口唇部は丸く肥厚して内側へせり出している。外面口唇部直下に浅い沈線が巡り、体部は内彎して丸みがある。内外面とも透明な灰釉が施されており、貫入が認められる。胎土は淡褐色と呈し、焼成は堅緻である。

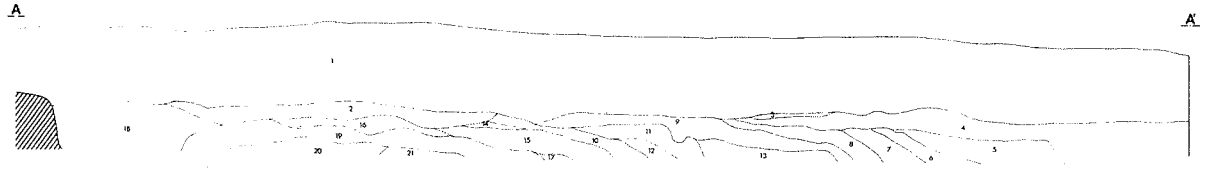
Ⅸ、内堀と外堀について

今回の発掘調査で検出された遺構のうち、深谷城に伴うものとして明瞭に確認しうるのは内堀跡と外堀跡のみである。内堀、外堀ともに予想以上に大規模なもので、表面的にはトレンチを設定して調査を行なったが、深さや底面の状態は、湧水が激しいこと、地盤が極めて軟弱であること、市街地内で住宅が隣接していること等を考慮し、危険を避けてそれぞれの堀の一部分のみをパワーショベル掘削して確認した。その結果に基づい模式的に作成した推定図が第22図である。パワーショベルによる掘削中は、堀の覆土が湧水によって次々と崩れてくる状況で、全面的な確認ができなかったのは極めて残念であるが、安全性の面からは止むを得なかったものと考えている。

内堀跡は、Ａ区南端からＢ区北端にかけて検出された。本丸を囲む堀の一部であったものと考えられる。幅は21～22ｍに及び、現在の地表面からの深さは180～320㎝である。底面はＡ区側へ向ってしだいに深くなっており、２条の堀の方向に沿った畝状の隆起が認められ、堀の中央付近での現地表面よりの深さは約280㎝である。覆土は泥炭土質の灰色粘土を主体とし、Ａ区側では底面近くより葦の断片が出土した。また、Ｂ区側の底面近くには砂利が多く認められた。地元の方に聞いたところ、この内堀があった部分は昭和30年代頃までは東西に細長い沼地であったということで、内堀がある程度埋まって沼地となり（或いは口絵の深谷城趾絵図にみられるように水田化されていた可能性も高い）、さらにそれを埋め立てて現在のように宅地化されたものと考えられる。

外堀跡はＤ区の南端で検出された。城の大手にごく近い部分と推定される。残念ながら幅は確認できなかったが、口絵の深谷城趾絵図などから、内堀以上の幅があったものと想像できる。現在の地表面からの深さは約230㎝で、覆土の状況等は内堀とほぼ同様であった。現在の状況に至るまでも、内堀と類似した経過をたどったものと考えられる。

なお、内堀外堀とも壁は比較的急角度で傾斜し、底面での地山は緑灰色粘土であった。

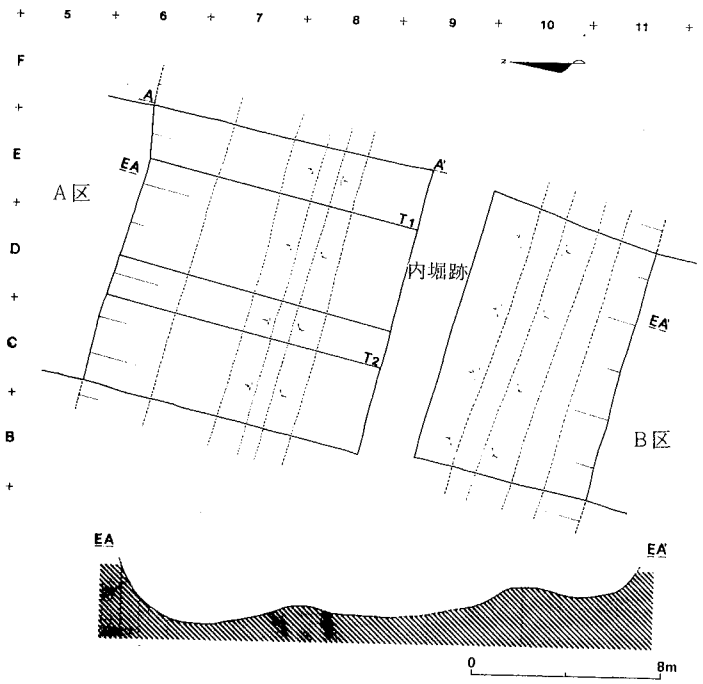


1、暗褐色土（表土＝埋土）
2、　〃　（砂利を含む）
3、黒褐色土（小砂利を含む）
4、灰褐色土
5、暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
6、明褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
7、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
8、明褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
9、暗褐色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
10、黄褐色土（ロームブロックを多量に含む）
11、灰褐色土（ロームブロック、粘土ブロックを含む）
12、灰褐色土（ロームブロックを少量含む）
13、黒色土
14、黄褐色土（ロームブロックを多量に含む）
15、黒色土（ロームブロックを含む）
16、黒褐色土（ロームブロックを含む）
17、灰褐色土（ロームブロックを含む）
18、暗褐色土
19、黒色土（ロームブロック、粘土ブロックを多量に含む）
20、黒褐色土（ロームブロック、粘土ブロックを少量含む）
21、黄褐色土（ロームブロックを多量に含む）

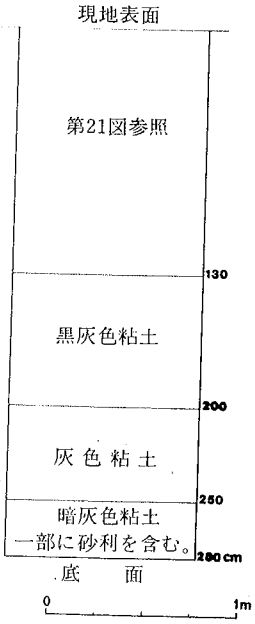
1、暗褐色土（表土。砂利、ロームブロック等を含む）
2、黒色土（砂利、炭化物、焼土を含む）
3、暗灰褐色土（砂利を多量に含む）
4、　〃　（3より暗い。砂利を含む）
5、　〃
6、　〃　（砂利を含む）
7、灰褐色土（ロームブロック、黄色粘土ブロック、白色粘土ブロック、黒色土を霜降り状に含む）
8、明灰褐色土（ロームブロック、白色粘土ブロックを少量含む）
9、黒色土（ロームブロック、黄色粘土ブロック、白色粘土ブロックを多量に含み、霜降り状を呈する。）
10、灰色土（炭化物を少量含む）
11、黄褐色土（黄白色粘土ブロック、ロームブロックを含む）
12、明褐色土（ローム粒子、黄白色粘土粒子を含む）
13、　〃　（白色粘土ブロックを多量に含む）
14、黒褐色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）

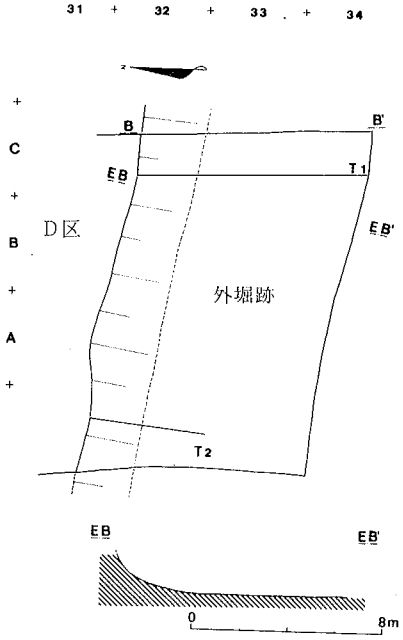
0　2m

第21図　内堀・外堀土層断面図（1/80）

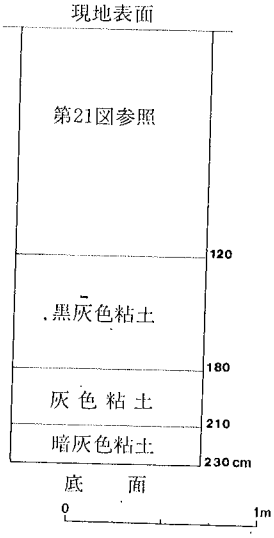


内堀土層断面模式図（中央付近）

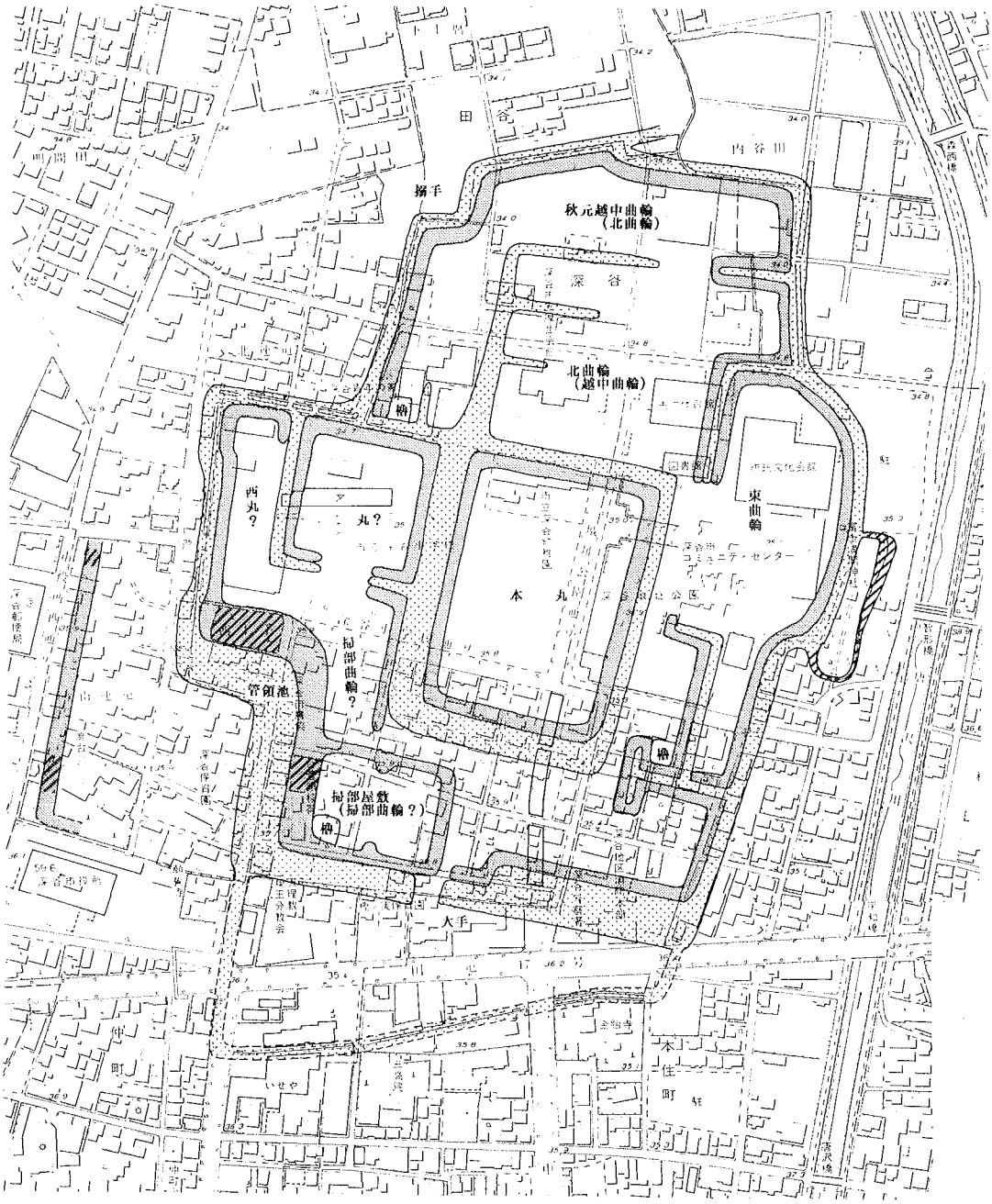




外堀土層断面模式図



第22図　内堀・外堀模式図



土塁　　堀

現在残っている遺構（または遺構と思われる部分）

第23図　深谷城跡推定図（1/　）

X．まとめ

城館跡の発掘調査ではままあることだが、この発掘調査でも出土遺物はごく僅かである。しかも、深谷城があった時代のものと考えられる遺物はほとんどなく、したがって深谷城に伴うものとして確実に把握しうる遺構も堀跡を除くと皆無に近い状態で、わずかに井戸跡のいくつかにその可能性が認められるにすぎない。しかし、内堀跡と外堀跡と考えられる遺構が検出されたことから、ここでは深谷城の構造的な面について若干の検討をしておきたい。

さて、第23図は、第Ⅲ章でも述べたように、口絵の深谷城阯絵図、「武蔵志」の深谷記に載る深谷古城図、旧小字図、さらに今回の発掘調査成果などに基づいて作成した深谷城跡の推定図である。発堀調査成果などの具体的な根拠に乏しいため、細部については問題が多く、特に東南部の櫓を含む堀と土塁の配置などについては疑問が大きい。すなわちこの推定図は実験的な意味を越えるものではない。

この発掘調査では、A区南端からB区北端にかけてとD区の南端に大規模な堀跡を検出した。前者は幅21～22m、現地表面からの深さ180～320cmで、本丸を囲む内堀跡であろうと推定した。後者は、幅は確認できなかったが前者以上であろうと思われ、現地表面からの深さ約230cmで、城のいわゆる大手に近い外堀跡と推定した。後者を外堀跡と推定することにほとんど問題はないものと思われるが、前者は、先に配置に疑問が大きいとした東南部の堀が東から延びていたものという可能性も残る。その場合、本丸は第23図よりもかなり狭い範囲となろう。なお、第23図のように前者を本丸を囲む内堀とみても、本丸は、深谷城以前に深谷上杉氏の居城であった庁鼻和城跡の内郭（一辺約180mの正方形を呈する）よりもやや小さいものと推定される。

内堀外堀ともに予想以上に大規模なものであったが、深谷城全体にこうした大規模な堀が巡っていたかは不明である。今回の発掘調査区は城跡南部の大手に近い部分とみられ、特に大規模に構築された可能性もあろう。地形的にみても、城の北側から西側にかけては低湿地で外部からは攻めにくいが、南側から西側にかけては平坦地であり、築城時にはこの方面に特に配慮がなされたものと思われる。この調査で検出された外堀の南側に、さらに堀があったともいわれ、そちらを外堀とよぶ地元の人もいる。この堀跡は現在は排水溝となっているが、深谷城の大手側は堀だけでも三重以上の構造になっていたとも考えられ、特に念入りに防禦設備が構築されていたものと思われる。ちなみに深谷城跡に南接する部分の小字名は侍町（とのまち）である。

今回の発掘調査の対象面積は約2,700m²で、総面積20haに及ぶといわれる深谷城跡のわずか１％強にすぎず、これだけでは深谷城全体の構造を推定する手がかりにすらなるものではない。しかし、堀跡を現実に確認し、従来の城跡の推定に修正を加える根拠になりえたという点で、この調査の意義は大きかったといえよう。

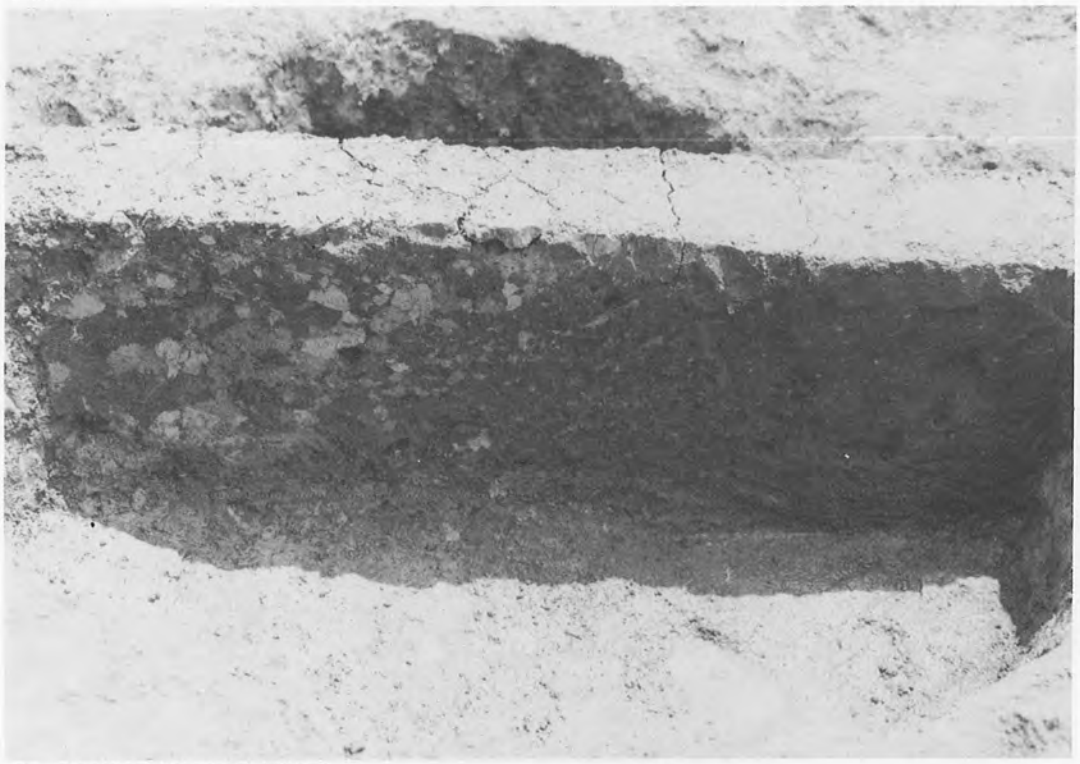
余談ではあるが、調査参加者の中に陶芸を趣味とする方があり、内堀底面の地山の緑灰色粘土を採取し、それで作った茶碗をいただいた。この粘土は鉄分が多く含まれているらしく、胎土が見事な赤褐色となった点が興味深かった。この発掘調査の良き記念品として愛用させていただいている。

写　真　図　版

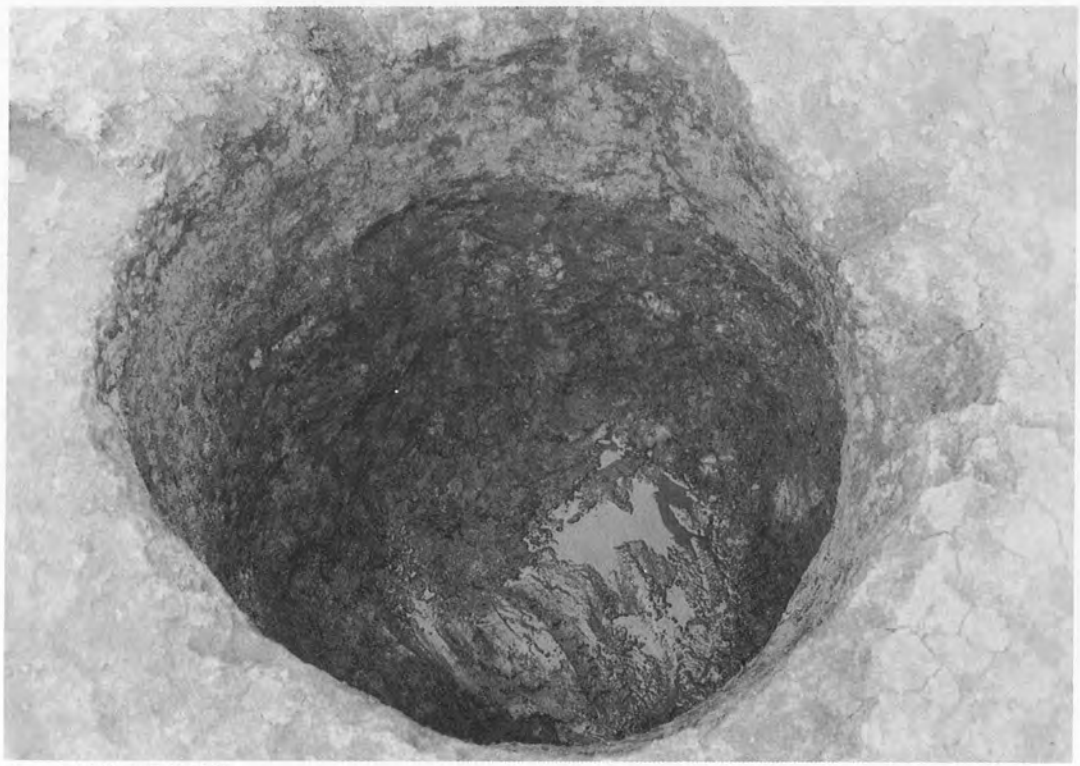
1．調査風景

2．A区全景（北から）

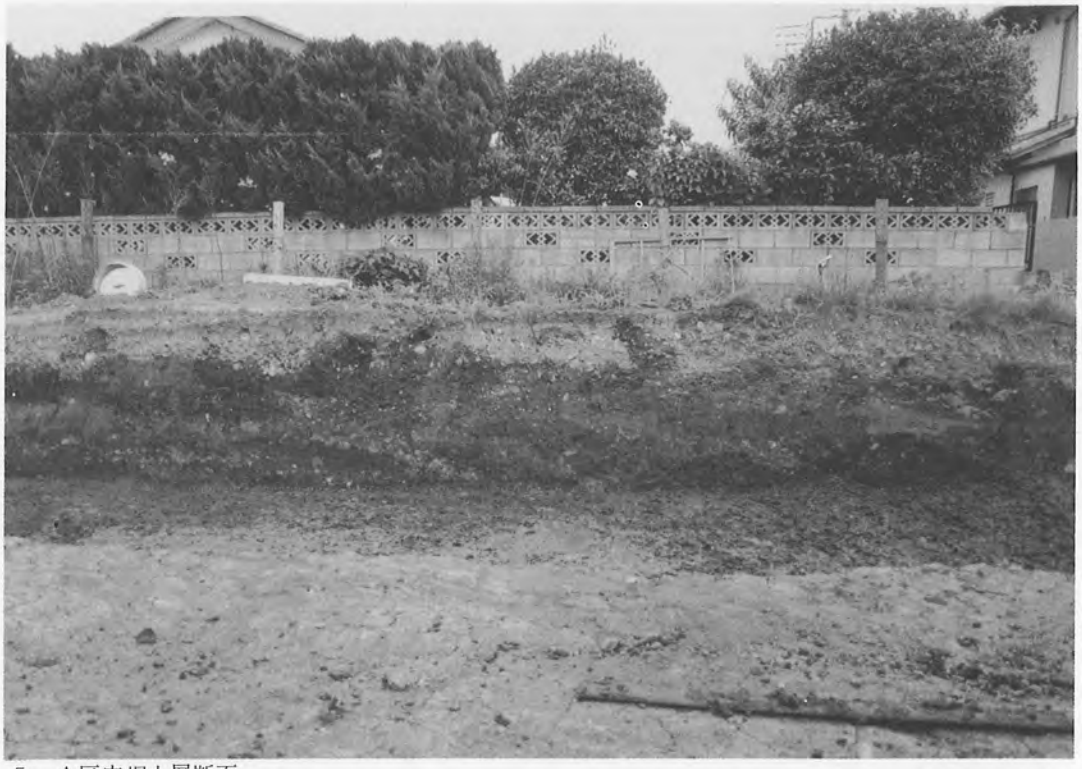
図版 2



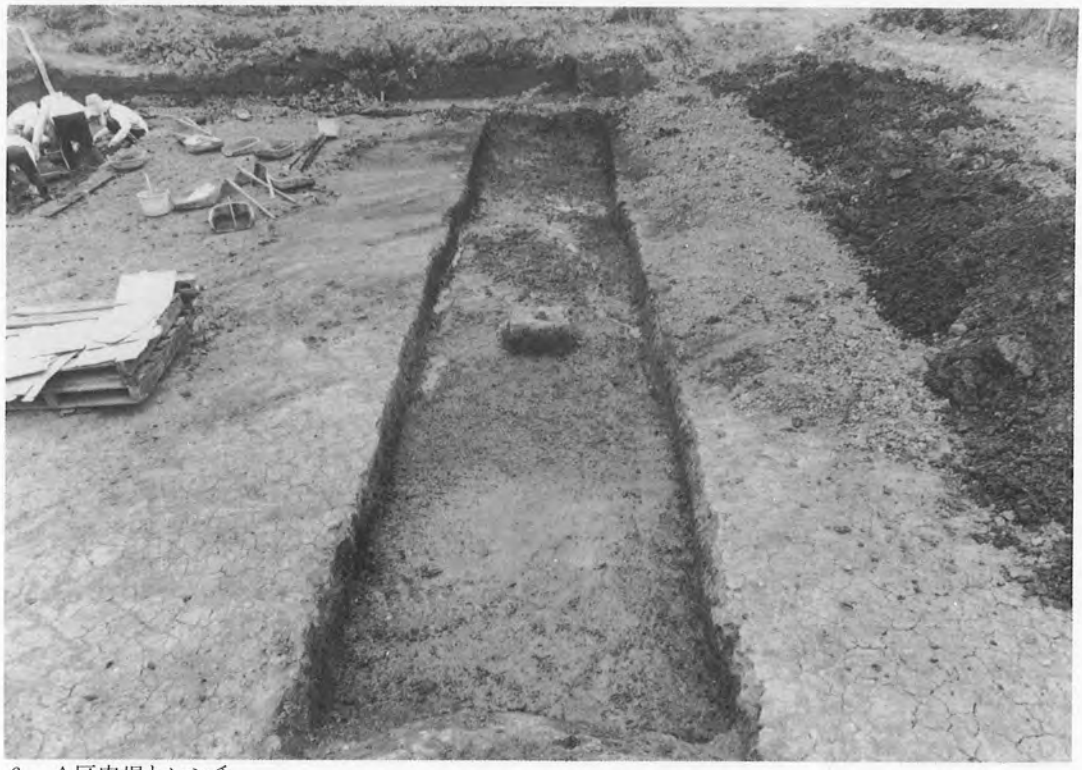
3．A区第1号井戸跡土層断面



4．A区第1号井戸跡



5．A区内堀土層断面



6．A区内堀トレンチ

図版 4

7．A区内堀底の状態

8．A区内堀内木樋状の遺構

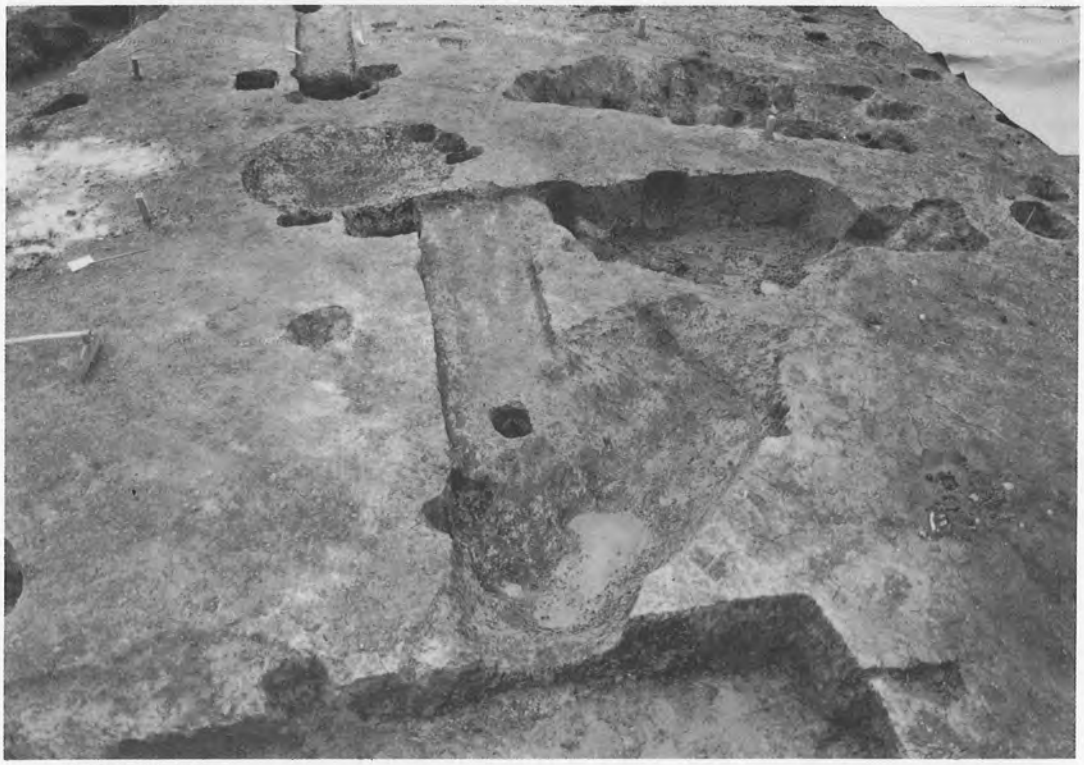
9．B区全景（南から）

10．B区柱穴

図版 6

11. C区全景（北から）

12. C区全景（南から）



13. C区第5号土坑

14. C区第9号土坑遺物出土状態

図版 8

15. C区第14号土坑

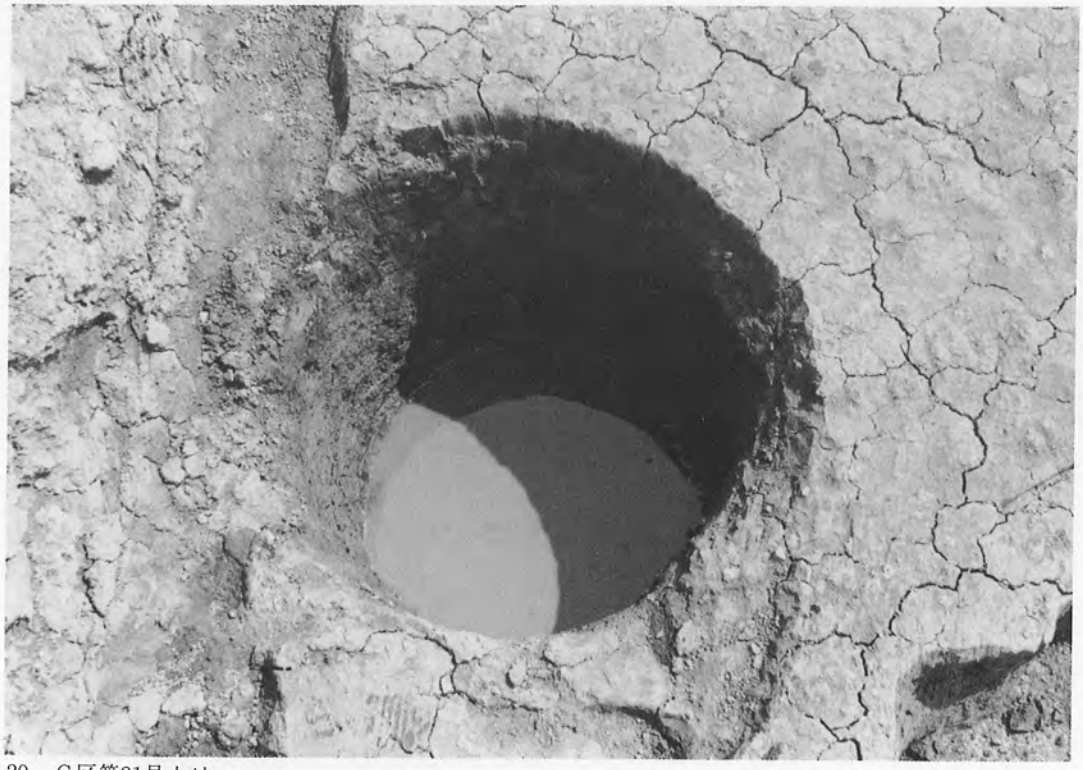
16. C区第14号土坑遺物出土状態(1)

17. C区第14号土坑遺物出土状態(2)

18. C区第14号土坑遺物出土状態(3)

図版10

19. C区第10号土坑

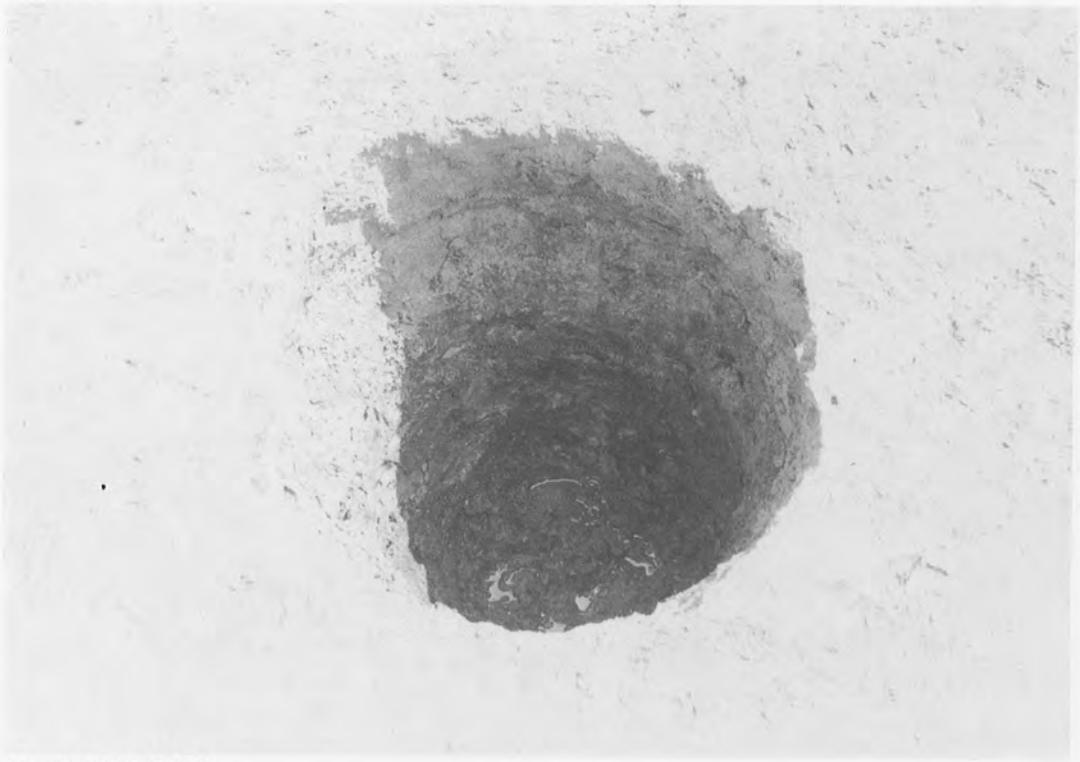


20. C区第21号土坑

21. D区全景（北から）

22. D区外堀の状態

図版12



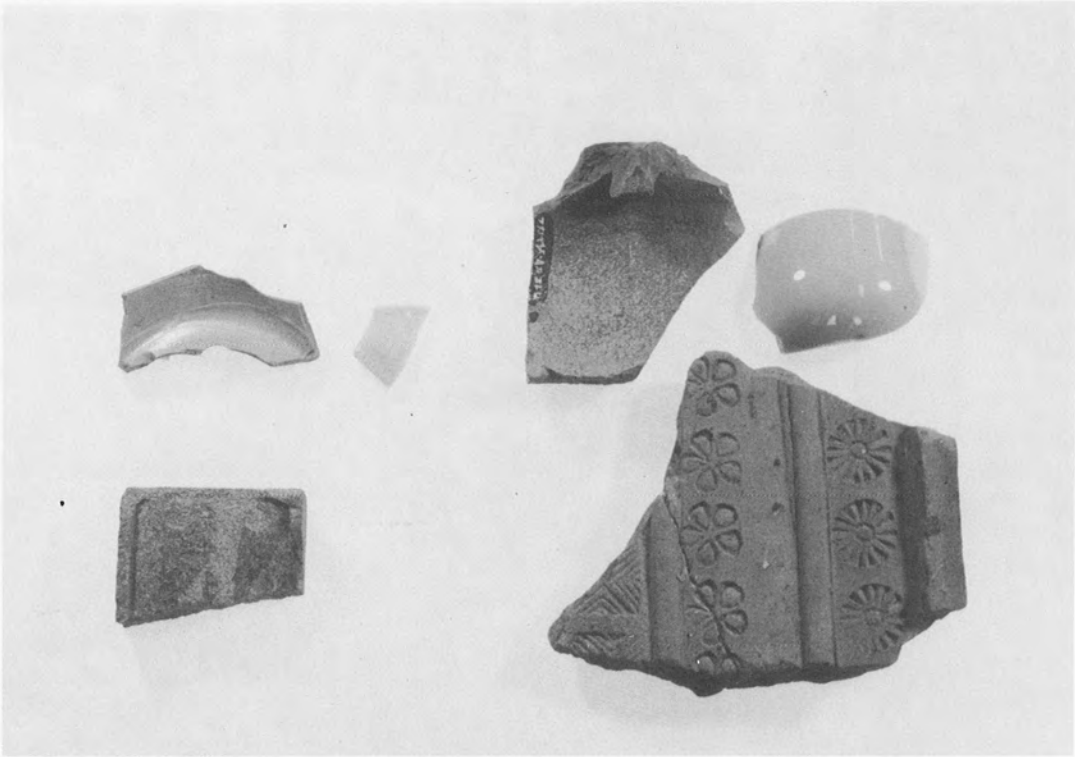
23. D区第5号土坑

24. D区第7号土坑

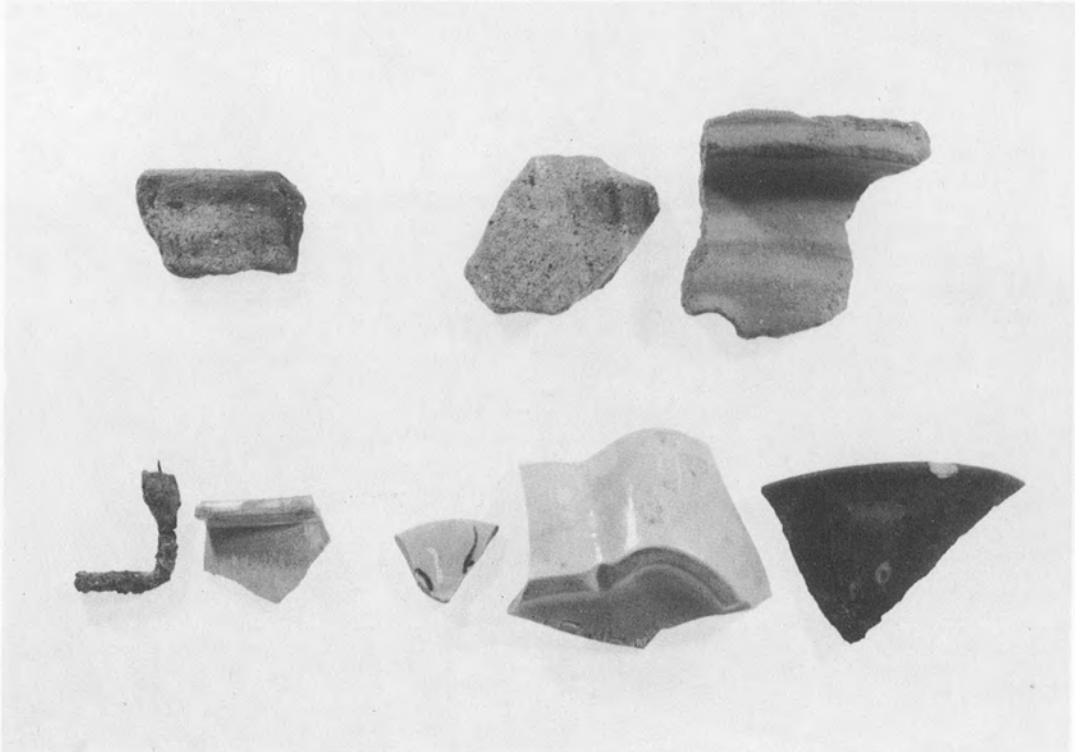
25．調査風景

26．重機による表土削除

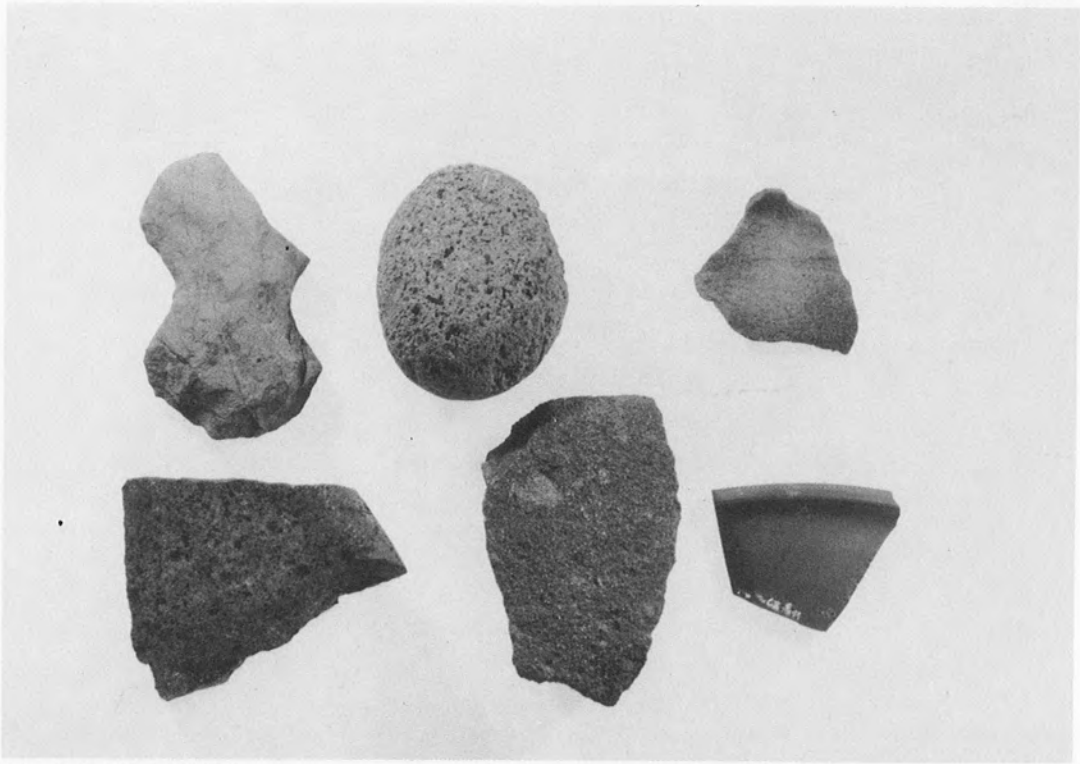
図版14



27. A区の出土遺物



28. B区の出土遺物



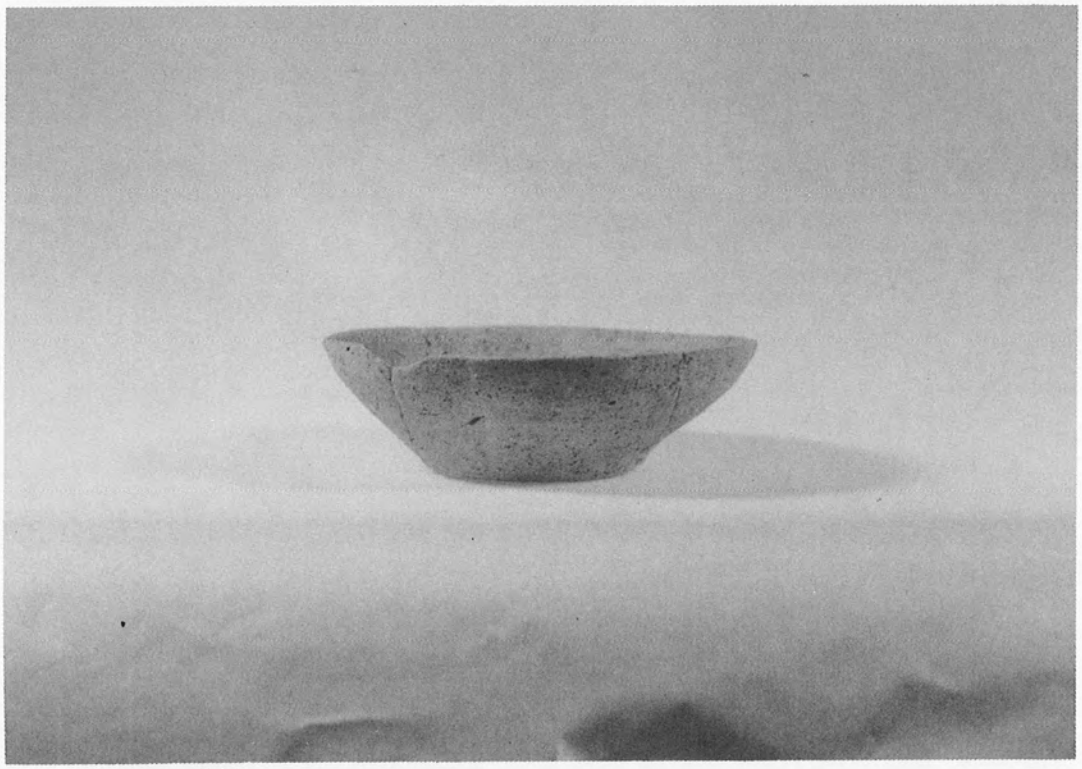
29. C区の出土遺物(1)

30. C区の出土遺物(2)

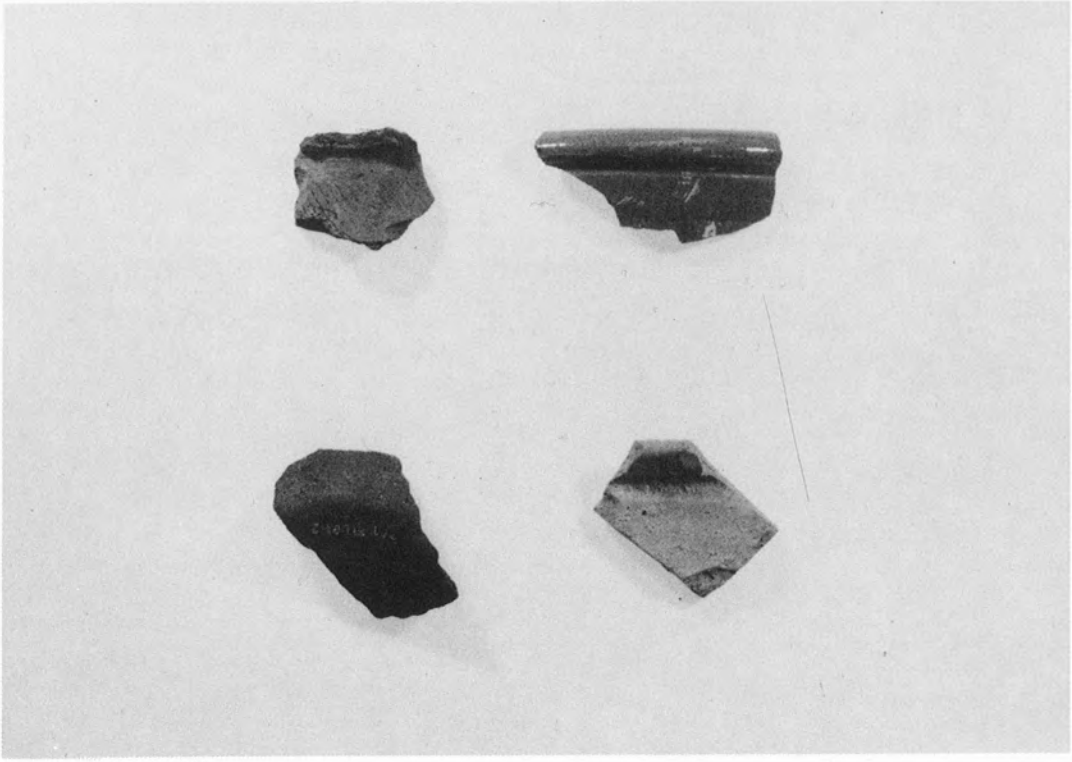
図版16

31. C区の出土遺物(3)

32. C区の出土遺物(4)



33. C区の出土遺物(5)



34. D区の出土遺物

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第17集

深　谷　城　跡

印刷　昭和62年３月９日
発行　昭和62年３月25日

発行　埼玉県深谷市教育委員会
印刷　大屋印刷株式会社